

煙霞小景

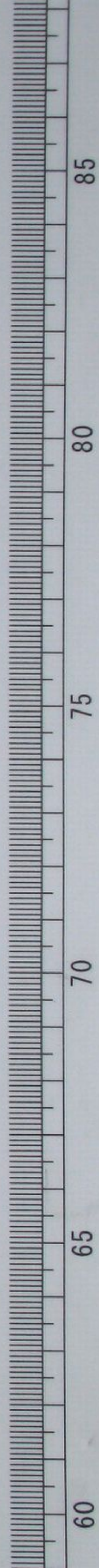
卷二

特別

イ 4

3152

43





14  
3152  
43



95-62

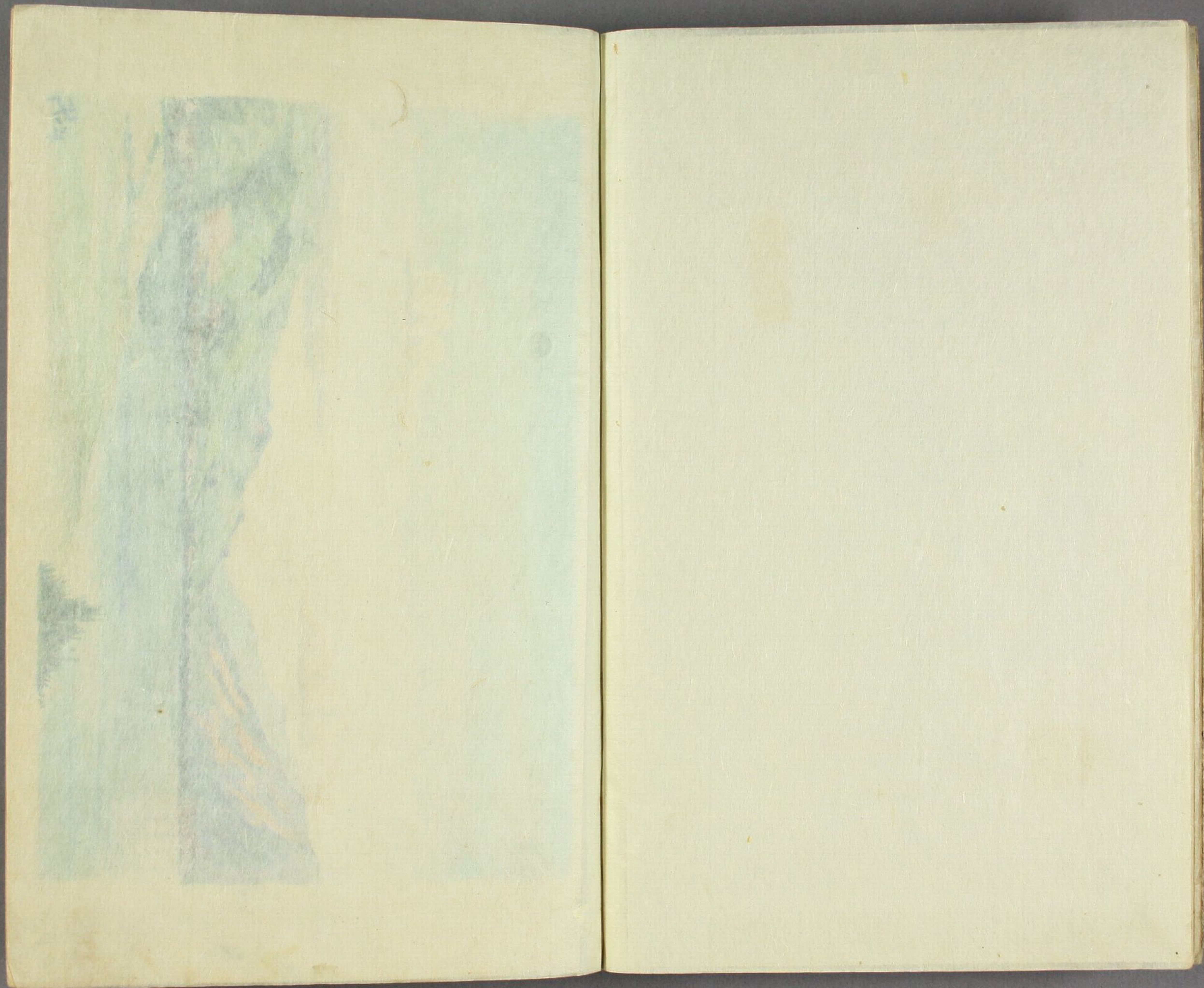


煙霞小景

卷貳

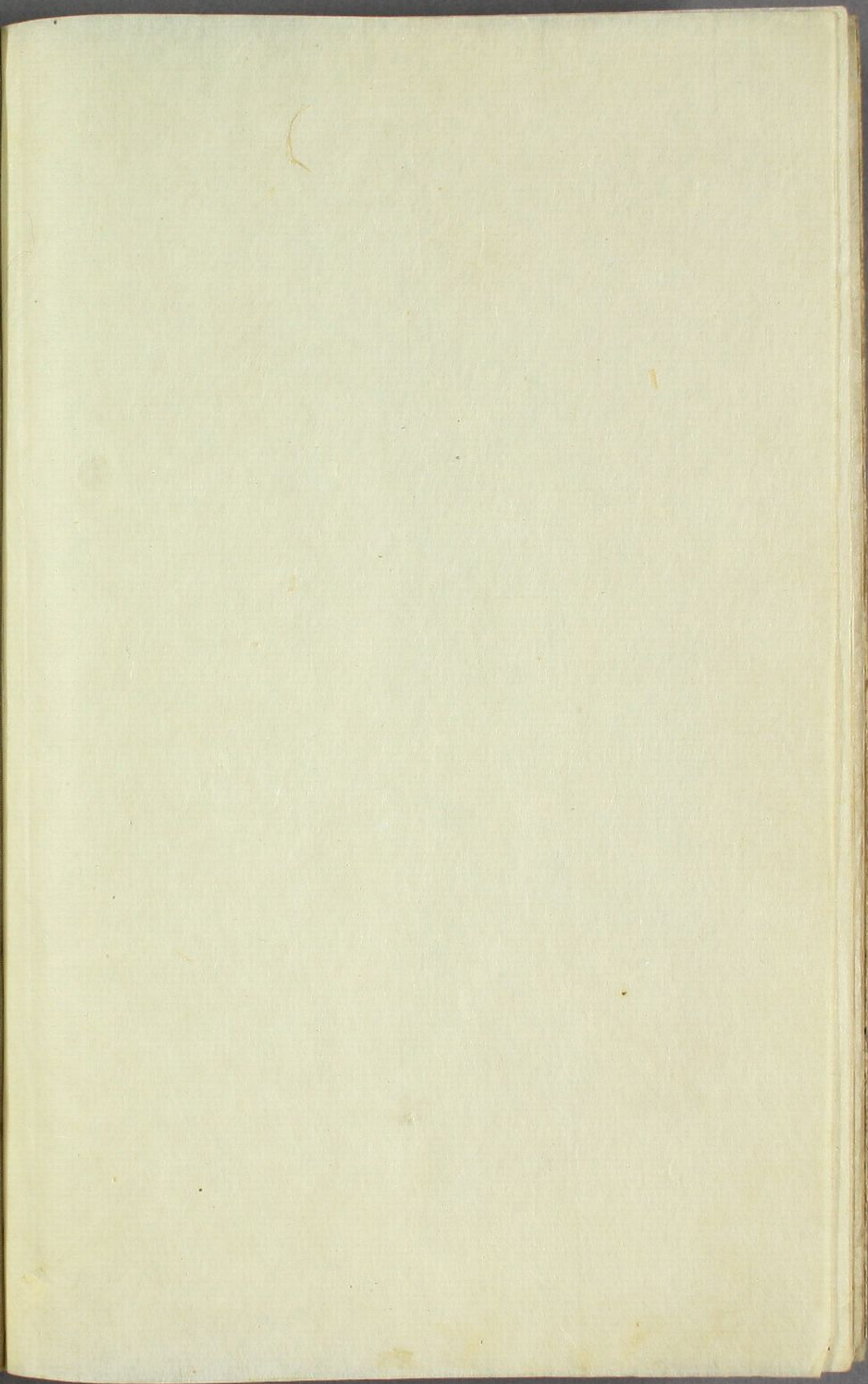








Pl. 24.









ちりりい埋まる四畳床の外に天地ありと知る  
日月しりる悟らば只字義と首引なきあや  
一期を過ぐるものあり名けし本の虫と地  
しなきちりとと腑甲斐なき振舞うか知ら  
すや千万無量此利益と快樂とと世界り  
満たり人の集まるまゝ人せは觀志人到此なるま  
自然と樂ぶ血不のあと空しく夏首の我はる  
野辺りも古し武夫の俤を思ひ木がらもあはる  
山寺りて浮世を外の比丘尼が物語今宵一夜



を明あすル興あり、いかりいともむゆ、不二乃ちあがり  
によちて人を羨ひ、松山地浪あけて、世を恨む際  
とる形らむ、いふ小人の情、いふにしり、むむ青琴  
韻士の所謂、茫々天地、總吾、あともむげに理せめ  
たり、目に見耳小聞、く自の、總づ、我が葉籠中  
のよあかるに、自ら捨て、顧みる、とむむ、即ち寶  
地山入り、く空しく還る、壁、りり、か、ら、ず、や、  
叶不幸、りし、く、學問を思ひ、ま、ち、空、く、机、り、  
く、ひ、つ、く、弱虫、よ、い、い、吾等と俱り、来れ、天地玉  
る所、學びの庭にあらざる、い、れ、し、破れ、埒、と、一、枚

の、笑、ハ、風雨を防ぐ、小足り、むむ、古び、埒、と、一、足、の  
鞋、と、山河を越ゆる、り、事、飲、げ、じ、さ、ら、む、車馬  
乃、崎、羅、成、つ、と、し、く、道、ち、と、ハ、何、を、る、ゆ、め、の、む、と  
ち、ら、む、い、れ、ハ、足、弱、と、ら、し、ハ、凡、丈、ぢ、ぢ、り、  
青琴韻士、夙り、風雲の思、深、く、學、事、暇、あ、ま、  
飄、然、と、く、く、山、野、り、嘯、く、其、詩、り、幾、す、る、金、玉、の  
韻、ハ、即、ち、是、山、河、海、嶽、の、返、響、ち、ら、ぶ、る、い、れ、し、吾、れ  
固、り、其、偶、然、り、し、ら、む、い、れ、し、今、や、數、年  
の、紀、行、を、編、み、く、卷、を、ぬ、す、必、ず、也、風、流、余、韻  
此、溢、る、を、想、え、む、學、者、先、づ、見、よ、



世も猿の鴉を使ふは、いと多あり、其可矣。  
一は限りなし、韻士の之を知るや否や。

荷風堂主人

たすす

明治廿九丙申年

五月中澣



煙霞小景 第二卷

第六拾五國游記

濱街道

水戸

鹿島

房總

甲乙丙

大港の夜景

湘中

熱海

満目の古蹟

修善寺

戸田

駿南

嶽の西麓

第二回登嶽

嶽の北麓

登嶽者種級

峽



鵜湖

故園の風色

浅間噴火阮

妙儀山

榛名山

上毛風俗

赤城山

毛野巡覽

那須の路

不忘山











何處には猶ほ取處ありまに亦の葉や破れ花とは文  
 以て欲しからざるを念て朝は生打を腹に物知らぬ安  
 人無用とせ敵も玉ひるといはぬ汗のけしきこはかしこも八  
 幡殿の御歌よみ給ひしかの山姥の名木が老ひ朽ちて變せ  
 しもの世は稀なる奇なり峰々に朽ちては物怪しき物  
 等とて生り膨れ白んかき急ぎ行きて驛を出て許  
 心は世傍不標存るといふより右折し溪谷の回を行くは  
 子して小山の樹鹿の遠しや、嶮しき坂ながら一息も登り事  
 ば立派にして敷平垣の分が、~~山姥~~山姥地たりといふ老松十年  
 株直とこしこも冷やたるしと枝を文へ樹齡を清く陰に

箱日物誌人而著  
 人依物以名常與境  
 関和勿末山運櫻花  
 弄春晴將軍義家  
 討叛賊千里領兵方東  
 征途過此國暮春日  
 浴花飄舞繼將軍  
 梅戀詠国歌爾未驛安  
 訪迹多星相經全百  
 年名存物換少人過事  
 其洞月殿跡既但謀  
 録石樹幽隙事未及成  
 登即世孫孫繼志更  
 無他建碑遂離李膺  
 唇但賦錄歌記軍跡  
 需金背面誌期未同流  
 篤孝耐荒臺陳迹倭年  
 靡煙滅以石傳世誰有除  
 正是人物相須著永貽無  
 窮尤不虛

然るへく蟬聲の清き耳を洗ふに堪へり 松河の一碑の高き  
 夫許石面を思ひしきり 石の指となす故を知らず表  
 浮波の吹く風を云り 二十字を刻し裏には吉原の事や同碑  
 雲の横に 銀河り鳴呼 乾坤萬古山河依然やして首の致め  
 か事少り去ては流水如く 推移少れも歌まはし英雄之馬の遺  
 跡今在 佳野草の離るる 此処を来者誰か 碑を打て高  
 懐古の涙を注ぎらば 眸を放て四顧すれば 西北方連山の里  
 鐘をきき 雲を東向 在望波 跡をたして 石の天竺蓮  
 に小名を遺し 連く大瀛 萬里水天青 浪の同布帆の點  
 こして 鷗を似せ 松川の磯は長汀 十里沙白し 松



青い海風颯々として海上より来り飄々として衣袂を舞物せ  
は羽衣をまきして昇仙するの想何うも此是に於て臨眺多し  
絶望を能くしりし

大正十一年四月廿七日 湯元温泉の浴場 友人烟相並街衢法  
深室に於て南に冠りし以て二里湯元温泉の温湯場あり  
湯質透明也、硫黄を帯ぶ探湯本快を覺ふ此の村端に  
鐵路の終りありし石炭を採掘し之を運搬する為に布  
設せしと云ふ

余、常念菅野丸尾の民も明治三十一年癸酉、日を以て仙遊と  
して坂本中島、湯野、湯元、川尻、泊し、百十里の水は着す、行程七十里

### 二水戸

水戸は上り下り各名上り也。故に下市も蠅を以て名物と  
す。皆厭ふ。故に昔も水戸夢も終つて明も水戸七  
月曾官復通す有るを云ふ。此ら見物し何れ

先づ城地を見ず市中央上下市の間に河、北に那珂の流を  
帯び南は仙波の湖、臨み形勢自ら雄拔と見ゆ。今や廢城  
として城外遺跡僅かに見ふ。此にヨリ常陸師範学校あり、公  
園あり、公園は市監公園と對し水は公園と稱す。園内に馬  
車道、鉄道の行つて、館は天保九年烈公府邸の建つる此常  
陸の城、其の推しし。廢城あり。一部は今幼稚園となりて



在し規模の一斑を考ふに館後弘道館碑は寒水石を  
以て造り高き五丈幅六尺餘の巨匠なり園中梅樹は百餘株  
林同烈公種梅碑又孔子廟の正門戟門を設けて大成  
殿を擬し今は常に門を鎖して漫りに人の入るを禁ず

本館公園は昔借樂園といふ天保十三年烈公の拓きし  
所南には仙波湖を俯瞰し汎波寺の徳の御事密工時に  
林泉の美自ら備はり如文學堂書樓何陋老仙史堂等  
烈公の思ふに築きし者瀟洒奇なり園中高き石臺  
に梅樹數株を栽り古幹槎枒鐵枝若根花の如  
きを思ひやう園の有名なる職として此より

園の東鄰本館神社なり義烈公を合祀す祠宇瀟  
灑高雅其右に神樂殿あり烈公の造りし陣太鼓の園の  
池の周圍又其傍に鎮靈社は昔水以来汎波の雲道  
失<sup>せ</sup>櫻田の雪と清く近き西海の石燈陣雨の中國書の如  
おれり水は志士千餘の遺魂義魄は實に此二廟の中に  
鎮在す尊きき限なき

仙波湖は公園の南にあり周圍殆んど二里中ほとと崎の澤の  
勝河車は留連りて遠く松原を望み南は紅葉  
高の森に對し雲は流波根の峰を仰ぎ此は山城を觀風景  
殊に趁丸の由指しおし高き水々く潤れ唯一個の泥忍なり



此のこゝにうたひあり

常盤原より東湖先生の墓を展す時正に午乃ち初めか  
此の流し遊はれしをよしに平磯、藤岡、誠二、遊す午は身若  
浪をよす舟多積し、那珂川より、潮止り退き、風浪  
おらぬ舟行大に、緩急の重の回波おそく、二河を巻く、漸く那珂  
港より舟を重く、舟するに半里平磯に達し、棹を控す。  
平磯は海澄澄、潮水極め清澄、風景吹く爽、洞もまは一  
漁村過ぎ、やしが海水浴場設けられ、東大の面目を改め、いふ地  
鯉、鰻を以て、舟に、紅肉、盤、玉、湯、新鮮、肥、美、最  
と、味なり、夜風、雨、雷、電、を、驅り、杜、快、と、言、は、し、可、し。

三鹿島

首<sup>+</sup>朝<sup>+</sup>朝<sup>+</sup>の<sup>+</sup>白<sup>+</sup>路<sup>+</sup>を<sup>+</sup>那<sup>+</sup>珂<sup>+</sup>の<sup>+</sup>川<sup>+</sup>打<sup>+</sup>後<sup>+</sup>直<sup>+</sup>夫  
海<sup>+</sup>向<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>子<sup>+</sup>の<sup>+</sup>原<sup>+</sup>と<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>尖<sup>+</sup>砂<sup>+</sup>地<sup>+</sup>と<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>是<sup>+</sup>を<sup>+</sup>埋<sup>+</sup>め<sup>+</sup>る<sup>+</sup>松<sup>+</sup>松<sup>+</sup>書<sup>+</sup>取<sup>+</sup>道<sup>+</sup>  
遠<sup>+</sup>近<sup>+</sup>の<sup>+</sup>大<sup>+</sup>い<sup>+</sup>連<sup>+</sup>ぶ<sup>+</sup>風<sup>+</sup>多<sup>+</sup>雲<sup>+</sup>と<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>濃<sup>+</sup>霧<sup>+</sup>なり、大<sup>+</sup>浪<sup>+</sup>沖<sup>+</sup>に<sup>+</sup>は<sup>+</sup>岬<sup>+</sup>頭<sup>+</sup>  
不<sup>+</sup>階<sup>+</sup>敷<sup>+</sup>下<sup>+</sup>段<sup>+</sup>上<sup>+</sup>に<sup>+</sup>は<sup>+</sup>老<sup>+</sup>樹<sup>+</sup>森<sup>+</sup>と<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>中<sup>+</sup>天<sup>+</sup>を<sup>+</sup>蔽<sup>+</sup>ひ<sup>+</sup>瑞<sup>+</sup>離<sup>+</sup>の<sup>+</sup>岬<sup>+</sup>  
磯<sup>+</sup>崖<sup>+</sup>を<sup>+</sup>高<sup>+</sup>嶺<sup>+</sup>と<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>中<sup>+</sup>威<sup>+</sup>の<sup>+</sup>岬<sup>+</sup>も<sup>+</sup>高<sup>+</sup>嶺<sup>+</sup>と<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>岬<sup>+</sup>は<sup>+</sup>海<sup>+</sup>中<sup>+</sup>に<sup>+</sup>出  
す、三<sup>+</sup>丁<sup>+</sup>許<sup>+</sup>岸<sup>+</sup>上<sup>+</sup>に<sup>+</sup>古<sup>+</sup>杉<sup>+</sup>林<sup>+</sup>と<sup>+</sup>い<sup>+</sup>ふ<sup>+</sup>岬<sup>+</sup>の<sup>+</sup>岬<sup>+</sup>は<sup>+</sup>海<sup>+</sup>中<sup>+</sup>に<sup>+</sup>出  
には<sup>+</sup>奇<sup>+</sup>先<sup>+</sup>怪<sup>+</sup>石<sup>+</sup>多<sup>+</sup>く<sup>+</sup>あり、岬<sup>+</sup>の<sup>+</sup>激<sup>+</sup>浪<sup>+</sup>之<sup>+</sup>を<sup>+</sup>撲<sup>+</sup>ち<sup>+</sup>、船<sup>+</sup>の<sup>+</sup>帆<sup>+</sup>を  
遠<sup>+</sup>雷<sup>+</sup>の<sup>+</sup>如<sup>+</sup>く<sup>+</sup>魚<sup>+</sup>籠<sup>+</sup>を<sup>+</sup>受<sup>+</sup>す<sup>+</sup>、岬<sup>+</sup>の<sup>+</sup>決<sup>+</sup>れ<sup>+</sup>は<sup>+</sup>船<sup>+</sup>を<sup>+</sup>大<sup>+</sup>平<sup>+</sup>の<sup>+</sup>洋  
に<sup>+</sup>送<sup>+</sup>り、天<sup>+</sup>と<sup>+</sup>連<sup>+</sup>なり、白<sup>+</sup>帆<sup>+</sup>を<sup>+</sup>波<sup>+</sup>に<sup>+</sup>送<sup>+</sup>り、岬<sup>+</sup>の<sup>+</sup>岬<sup>+</sup>頭<sup>+</sup>なり。



折しも鳥輪海天の上は井は日暮家雄語最は快然と受  
ぬ岸上酒樓あり

幾層を穿り一老に遇ひ鹿島へ此を回らんに以てり軍鋒  
田と云ふなり 舟十時許の頃出帆する 小湊船は是より  
行多きを故へられ是船と舟を急まし 行路や時  
暈忽ちと坂をちりして山を越えて水田なり 只然と若者麦島を  
多み突天のつるきと 陸舟の影を見れば正午十二時頃なるに斜  
甲よりば機匠は此の湫留三時舟より登りし如き海陸の  
りか全方なれば歩行と決し一階に健ひ日影傾きし頃  
お此浦の湖岸に泊るなり

羽黒白似色

湖は宇陵浦支流として狭く長く見六河が如し 宇陵岸を擁  
し布帆帯往の風景も佳なり 夕陽影を投じ湖面忽ち  
錦繡とし 湖波濺濺にして揺蕩するさま 殊と奇なる明の  
り 美絶幻絶の画手描くこと更に難し

札幌に遠く湖邊の舟に投ず此は風冷かに寒を氣付かせし  
明け止む煙を煙氣眞澄の中 湖光山影の回を行く五  
里にして 陸舟を看すは回すを 陸舟を大略無きもの  
いづ田圃の畦迄のなれば 故に建ふこと 厚なり

洞前の茶店に健ひ舟内者をやとひるを辨し 見ず洞は官  
部大社にして 武蔵権守を祭り 本社は大同二年 創建す



此杉樹鬱々として物りか回邊海に自ら木村園社  
殿の氣多起りしに洞殿は宏社をふまはらぬが善書畫  
美書畫と申すに儼乎として神在す如し欄柱河木楠な  
ど色も彫飾丹朱金碧を施さず苔痕微かに濕るま  
雅致極りなし社の主要の外は位のもやも奥宮雜殿  
宗庫を以て此のとも根末社如く盛岡なる境内に散在  
して廿數處何なるも知られずこの結構筆致のよく書寫  
するに似たり

社域に七不思議あり鹿島神社繪圖中より抄録せ  
るは要す、石根底ふりまゝにして傳へる相傳り地下

大魚河鹿島神は石を以て其魚に釘し自在に振動す  
と傳へたり石根地は今も其の深き水は魚門に三三たを  
けりるをまゝと長きも窟むる能はずして出せり  
二月は津洗の水、深き大いふをよらぬ乳をすりては  
和社距離は二町許信鳥北に池の廣を十町四方は  
は泉源に湧出し四町許者病を治すと傳へる(泉)  
三りは志無山、流るくほむ水行(か)  
四りは津原の花より一年の吉凶をせられ  
五りは海の前には浪のひきよる方より何日か  
とけり下の言はむかひは必ず雨降る



いづれ根原の松、志をみ山の内、松を伐て断伐  
おぼすり葉の生出さ、必な伐つ松のこぼし

七は松若葉の脂をす月松の内はた若葉をいして  
松はしやうりて家毎に朝の用を也

又親賢夫の坐禪窟有り、傍には石花積り少す昔し  
夫は安んずりて目之控を今寫して修行せしれり今に  
思ふ不白しと云の形跡ありを梅正理し藏する常事也  
廿也高天原御笠山など事解はこしし長け水も  
廿所は見えざる絶たし三様のもの神靈境界域ありて  
こゝにさう覚やまのなまがふも地解有り是は如何に

鹿島を登りて息柵を向ふ日に二年を過す熱も地ぬに  
猶も居てすを三里にして遠す

は初は鹿島本最と係せし三社と云ふ程は格別見  
したく水鳥た下の女瓶男瓶見えず、舟を然を刀根川を渡

河は浦浦まほしきと收ふ事なり、浪逆浦りるる故川幅  
ひらして二里を余り依然して大湖の觀をたす水白風靜か  
らして浪さくねば一碧禁朗鏡白の如く白帆貼して行かす  
影の倒映さす殊に明なり、時、鷗鷺の浮遊して孤蓬の  
間に出没するを、極聲伊勢しし舟りるる小舟中流に



舟出折しはれ烟こもるは白紅を波のほかに没しは  
 山色水色一呼吸向に愛し波に因りて霞綺水を流  
 じる晚烟み遠く色して帆影忽ちほのくらく遠山の色は濃  
 き紫と青と白ふ計りのうらさをあはれと書き置きたり又二愛  
 し萬家皆煙と相映し空に花四半せらる見やるとは  
 一林の煙影みけい雲向一板の新目を露守婦城の瓜と疑  
 らはかり細く其光をも淡くして空むじ星の如し帆を撃ち  
 け奇景を歌ふ様に舟は早くも流れた山もさか  
 驛は河を隔て、息柁を相距る三里地は下流の國を傳  
 へ畔の亭に宿す

羽里曰余憾青琴不詩  
 楓湖湖在河東郡野村  
 雖不甚大而風物絶美  
 画伯松本楓湖採菊於此  
 處云

此邊りや蘆荻間に鳥けり鴨の形しとがこころをく  
 づあはれおぼえぬもつたは舟今舟はこころはこころを鴨  
 やいして一板中にけり聲を鳥ととるへしかはたもたふ  
 らきり旅人の空傷ましめ杖を敲く物の哀れを感ぜし  
 ころのこころはつた鴨のみは

回分総甲

有昔川に流るるり世にたして鉛子と違ふは同の終極  
 一板たり流は刀根のこころにけり精細盛の京市街なりと  
 心より一里全同の空得比して鉛子と違ふ町中は時同  
 油釀造の南京蔵つらぬきと多し







坂右すは信也卯外坂神社を奉祀よしにて甲左  
賑ふまゝなり

十九朝四時をたに知を先直六鶴湖の湖は卯外敷  
可外なり廿四敷を先直往敷下歩 雙寺水を隔て相對  
し湖中に天女の祠有り一段風起を添ふたに天よの響け  
す四圍の柿楸烟を帯ひ糝糊として雨を合むが如く清涼花  
菖蒲風を觸れ水を拂ひ浪花は起り冷き風来りて  
骨を冷ふゆは晴の世に響けはは全く星出果宿のたに  
して天保元年の歲卯を以て奉遊せられ七律一首地は河  
りより廿名天に若しく 騷人韻上の奉遊す者多く此盛

稱揚す所何 鶴湖唱和のいふ書を以てしに河りに  
知名方家歌詠集に中を以て教へし せよと我を以てれば  
信置の景色を以て此少の美を先直星宿の如く詩句  
如東金卯外西湖の句に実を協はす清長は道とてを  
疑はしし況御も時稲田と灌漑する處に書き池水を決し  
と水は只一面の沈没すまじげに意は異おの富佐は今井也  
とて存すよし或は此水かき思はるる屋のありてを物色して得  
たもた疑無分猶別也哉

道とては廿四葉街道を以て今注をせられたりかこそ水  
り蛇湖にせり先直に某氏の詩を讀むに晴を圖中しりか



陸を以て見しし白草色なるは更に春く要するに個の湖也す  
まじり常村の代官某と云ふが造りしに日干天の時の用を充つ  
るなり

三つり大綱の巻を本納と云ふ驛中福神社有り三氏実録  
載す所橘樹神則ち是(一)美橋媛命を尊と云ふは  
日小正尊の寵妃にして相摸の津に没せしをむす尊は  
恙なく國より鹿野山の鬼賊を平ぎ長柄の方より里に  
来ると其遺物を埋めて陵を築き橘樹を植て標となし  
此の如様の船形擬せし故に帆と云ふ今は訛り本納とな  
り又船具を埋めし外は帆埋と云ふしが今は法目と云ふ如

午年の陵樹が翁樹にして辰年を日影と云ふ如きなり社  
版は昔の改築中にして未だ成らん

午時辰卯と着し友人伊藤理五郎を訪ふ勸待備を以て  
翌午の鯉魚を綱をひきて伊藤冠余等を招き没入救急を  
やせしこより二里許の沼川に流る船舟をせり川を上下してを整  
没人は水を盛り涙を揮り鯉の尾をこきまき沙のなごらに  
たうらを見し心定め周りに綱引きまはし物も皆水に潜り  
鯉を捕ふしを捕ふなりけり獲物多かりしを教子行のり  
老い度帰るに家より午飯酒などありし皆歡をなす歸後  
之を料理し又酒を置きて暢飲すは夜雷雨涼氣を益に



満山を登り已に十日終に雨たると大稲田野  
と遊覧す程なり一雨農家の慶知をなす

二十日田嶋寺と共登り之驛南を歩み山頂を以て大悲  
山と稱す其頂に推古天皇の朝始の建つ所近藤三幸  
僧傳教同山に爾後古字未年同世代詳ならず長元  
元年延暦寺自派の法師覺起之を興す本寺は西石  
に頂に河村道行の最教より同社けり登る寺は紫  
金窟と云つけ白衣大士の像を安置す四邊溪澗の同光  
樹美竹林として木蔭中へ海風直を知らず山頂上の  
茶亭を建ち各華骨一書の遊をたし日暮となれば歸來

如

二十日辭して出づ管子は獨り分れ長柄を杖と東京に  
かゝる余等三人是より房あり遊ぶ一宮の所迄り玉前神社  
を拜し又行きて大東山に上り岬は懸崖削りが如く甘奈  
岬迄は海中よりと里崎亂峙し岬下に巨鯨けり  
其下は則ち船一糸針路を浮れば破岸條忽  
同山岬岬遊下此遊寺は海澄沙湾空艇をたし下  
総飯園大木二岬と通り有名なる九十九里の長汀を寺  
岬上に登れば天風飄飄として欠と下し葦葦萬里三寺あり  
是を到る者の想けり杜快極まり矣



溪は鰯鮓の獵を以て名なり。此海の漁夫は年中鰯鮓釣  
を事とし一番鰯の聲をきき起ると海上三里の遠より油の光  
を燈の釣を以て示すなり。期即りて常に獲るははるかに鰯  
鮓は最も盛にして其期節にすれば海水色を變する程なり  
東条河の高山は其地を走り沙汀に立ちて三詠の同一調  
の響を隊定し其の上を陸を走るや直に千鰯を獲す。  
船は南海の方より漸に此來るといれし土佐河にはは二  
三月にとも東条には舟目と青葉の衣在松陽の吹このはる  
には今もは吹なり

海面を見れば其脊には蚌屬蝦蟹密着して皆出敵  
嶼の如く其形可なり。知らず一見するに鰻魚山の浮ぶ如しや  
しも明かに全身を見ざる者なく或は眼光鏡の如く見え或は  
鰻魚の如く見えを見ざる者なく知らず真か偽か  
此日勝浦を以てりて名すけ。此形一帶の海濱は柳濱と  
名し。其地は同様に伏し。此岬を以て巨礁を以て其  
海を蒼巖と云ふ。其の美を競ふ者煙一抔水天に漫く  
る際漁火遠近天と連りて日と光と相接し一幅奇絶の  
畫を成し來り

其の終ひ



三三〇 小湊より此は懸崖の半腹に降り下瞰すれども  
岩嶽三洪濤之を拍を澎濤盤旋し崖巖延て甲角と  
なり岫山腹を穿ちを捷路とす

小湊には有る寺あり 地位岫山を負ひて崖海下の元  
み西顧すれば古澄山の諸峰 里壘連亘し勝浦より波  
た忽ち刻々として出せり 濠州一望の平に降り 境内涌海堂  
廊也 懺敬なり 曲岸翁 詠る所 日蓮上人生る地と云ふ  
日家之同輩に一字の粘着を建立し良然消伸し念この檀  
那を以て法門長久の誓ふ 俗に云上総の七重法華堂は七浦  
の聖宗を大が歌目官なれども 然中長挾郡は祖地能を地

たればは也かをぬにも 他宗を以て凡偏固の信者多かりけるの即  
令も長と相りことなし 寺中に日蓮の遺像あり 又正信の妙満  
寺には其父母の墓ありと云ふ

内浦をすぎ天津のこゝを轉じて古澄山と号し 路は溪  
上に河のほとり改築せられしと覺しく 次なる車と迫るに折  
り真年の頃やんばはる者氣味を甚しく 尖崖を歩み隨て折る  
岫山に體し 名角の世し 嵩あり 一里半の途に  
間かきと号する 次に古澄寺あり 寺を降りて 崖  
の溪と相り 路記一冊 世に古  
は山は分ぬ 崖指の身たして 寶珠富生 如是金剛



露地獨鉉雞芥。等の諸峰。可。此。雲。際。山。之。  
老樹陰林。として。溪。澗。下。飛。水。自。ら。深。山。し。き。熱。河。  
リ。眺。望。可。た。ら。し。て。晴。天。の。日。に。は。南。方。向。三。群。島。を。水。  
雲。煙。洲。の。向。と。認。む。西。に。は。富。士。函。根。の。山。と。雷。音。夜。櫻。柳。  
の。半。に。隱。見。し。北。に。は。浪。波。難。夫。の。山。を。雲。霧。子。に。深。う。河。り。  
東。に。は。山。凌。の。市。街。暮。暁。下。散。す。か。い。り。寺。  
邊。岩。角。樹。の。隠。こ。し。て。一。家。の。百。軒。洋。散。然。す。る。河。り。  
自。ら。挑。海。仙。家。の。邊。河。り。  
山。上。の。旅。店。を。建。て。半。睡。し。日。漸。く。西。に。傾。く。以。て。歸。る。ま。さ。と。  
山。を。走。り。と。り。天。津。の。町。に。て。歸。り。ぬ。

羽黒日青琴今旅中  
常生日

前原貝渚を過ぐ山海巨老亂嶼散點之龍の掌り虎の牙  
何餘の走りや河魚跳るや河碧潮濤とて海  
面寒鏡のや霞綺紅ほち日鷗西三たぶ風鼓待佳  
也  
道下浪下河下日宝と余生月一室手摘り杯と酒  
然れ水中の河を流す三曹江見和田を往て朝雲  
出る海平概して岩礁多し  
白濱の南子野島岬河し奇岩突兀不森山鬼怒浪乾  
鞆之音和甘聲萬雷りかかか銀箔を散し晶簾  
と捲き上快気状すながら礫上舞天の祠と鐘を響り



岬の陸に過す此大澤一万余尋詔て之に隔りし年長歌  
たじと云は日布良と泊す

昔海濱に泊る洲崎を赴くは廻平沙青洲とて二里許  
の回連直し潮歌雷を捲き眼界絶や奇然と風浪帯  
の際西を多し舟夫は特に半か鬼が浦と云ふは日海天  
雲烟深く伊豆大島を指顧の中に何れも雲色を見え能  
はず

洲崎の地より下館山湾を帯びたに外洋を望み眺む物  
は佳園也洲崎神社は大澤中に見ゆる者にして世の從  
角の雲を現せし洞窟有り中に銀水と云ふ泉有り

は邊海邊出入屋曲之如しや湾を望み海潮古も澄澈水底  
を窺ふし

沙見岬の多し岬上の寒寺古松を望み任了龍杖松  
といふ身も僅し九人蟠柯徑塞地上は横臥し龍鬚  
虵鬚蒼蒼として法隆寺と古殿を敬ふと云し去れ天風一陣吹  
きたるの夜も過はる又蛟龍の吟を聞かば轉くを得むと云ふ  
と云木舟りとも餘りは懐の物と云ふ

館山を以て時止す年なり出水を過るを事と事一町の岬歌を  
得むと云ふおなり海濱に泊る教回汀歌に云く眺むれば  
萬里の蒼花一鑑の碧を凝らし富士の霞洲崎の煙



皆願町中より

は花月明にして風流に流後飄然空をまて 羨花邊上に道  
逢ふこと多し満身の風雲を帯びて峰々

二十朝夜雨大降り時に雷鳴なり衣掛書く濕ふは帯  
寺より寺を觀た構ゆる空を極め金装の唯其をす  
もせ里見氏の世に極ゆる十代の典籍其岩を知らぬを  
物を藏する少きなり市堂中には里見氏の世の市條河寺  
僧に先ひ世の世に教ゆる寺後の山上野草離るる中に十  
七の昔の田舎をとり亦里見氏の首をとり時に雨風の歌を  
雲猶ほ深きと云々

次那寺より遠く白衣士の金装なり坂東三三派の  
しりて害者遠近なり藤園にして香大常の絶ず紅松因  
刻轉錄古雅一見其妙に驚く鏡浦の風光弘席の下  
し西餘の秋水響環張溢し浪波白帆皆佳景を題極  
し自身は飄然として樂土に在る疑ふ

けり道を渡り山回りを遠く富山の樹木に  
伏姫の心身を律を隱れし其萬千百人満山樹木  
し此寺半流しす如く山空殊に雷如く山中に觀音の  
空に金装羅地桐り眺初よりよし聞はし道に登り  
し此寺其東方に伊豫嶽なり高きと略前者を抄録す



に等し風等と云仲の間に

大洪帝の加治山を海に流す保田より錮山を  
山は自然の境界に高嶺にして巖石嶮峻にして山骨露  
出し傾夫はたれ敷峰なり山勢有餘天を刺す如く  
し錮山を列ねるの敷に保田より登る三干町にして  
山中の寺院有り曰本寺と云其域内は今公園なる寺は  
由緒有りといふは佛大湊港として毒説の室潭に  
阿久比勝は多し其の古くは羅漢峰と  
いふ古の石像群立し或は頭落ち手擡げし者なり誰  
かより其の古年の鮮華を遺し低回せざる者も去て

瑠璃峰の十州覽に於て近頃は安房上総相模伊豆  
海嶽及び駿甲信常野武の諸島を望み眼下の海白丸  
然るも天を亂す龍の首には雲を望む由なる可惜此  
日西天降る雲氣滿ち望見する能はず忽ちにして日上巖峯  
落る暮靄蒼蒼海山全く霞罩せし又一日暮れ

山を望みし金文を以て明王岬とす即ち錮山の地は海  
下此處に相州浦を對し巖岩突兀千態万状昔は  
此處曲懸岬の腰を繞り風雨猛烈の時怒浪岸を拍き  
行旅の幸と詔みし所也今は改築せし此路難し  
是より地上緩圍を序つ清い水三里の同陸道七個



何れも是を著れ月海上を涼ひ涼風衣を拂ひ爽快  
言ふに西の海氣香花の同一點の紅光を認む水を出る  
少許燦然と星の如し漁火か燦火か嗚呼我之を得たり是  
對岸の相州觀音岬の燈臺なり。  
津村より南は南総の要津にして市街や、飯帳なり。  
翠流館は津河の上なり、風光較佳、欄を倚れば月明  
一河の金を流し白露の横けり、星を畫して書、かく天神の  
古廟、佳話の墟皆指せ、海面<sup>の</sup>暉霞里、漁火萬點の  
星の如し、樓は蒲酒雅際、侍坐、婢女皆家範の粧  
を著し、桂の妍を競ふ

六房総西

千古朝来微雨なり、少許にして歌も天猶ほ水す爽涼最宜し  
鹿野山の方を稱し、路鬼<sup>い</sup>渡山を過ぐ、父老の説に、水は古  
日本武尊東征し、山を討ち、皆敗走して、是山道水碑  
治世年と云ふ由は、名を置せしや、と、齋車野人の説、未だ  
容易に信ずるべし  
其の業、野の樹中、赤曲蛇行の路を行くと、約二里  
半、後、遠く、即ち鳥居崎、あつと、今途に、二、三の樹、茶屋  
あり、就て、眺望を、遠に、する、と、言ひ、こは、山中、あり、眺  
地、も、以、て、眼界、曠、闊、西、北、には、九十九、太、の、膝、を、控、へ、遊、は



木更津へ見山、安房鉦山、伊豫山、法澄山下、総の諸岬  
武蔵東系、横濱相模の横江、油の走水等皆、双峰中に  
横り、西板波、波城、日光、碓氷等、同左、三州の峰、嶺、嶺  
巖皆、嶺所、俯瞰の向、事、東、東、海、下、眼、下、に、行、海、水、一  
碧、未、待、船、舶、皆、然、こ、こ、の、敷、出、く、山、光、水、色、遠、近、濃、淡、の  
中、に、行、こ、こ、の、波、新、霜、名、を、有、る、如、く、忽、ち、無、き、如、く、變、化、の、動  
の、此、處、畫、圖、の、幕、に、得、る、所、に、行、こ、こ、の、此、日、西、方、雲、氣、舞、舞、  
然、こ、こ、の、揮、動、の、笑、笑、の、峰、其、朝、に、隱、見、し、僅、に、半、腹、を、露、  
は、し、海、史、の、こ、こ、又、見、多、る、所、西、施、か、羞、を、余、又、故、之、相、繼、  
に、心、を、こ、こ、の、澳、海、の、波、を、こ、こ、の、心、を、こ、こ、の、天、風、浩、浩、以、骨、持、り、山、を

とすも疑ふ

頂上は平地にして山中より開僻の地、西園に相連、山中諸岬  
の景、宛然として目睫に、神野寺の、嶺、其、ま、ま、杜、尚  
な、よ、と、今、将、老、波、也、と、美、樹、を、林、と、し、日、光、青、く、儒、素、  
不、語、自、鳴、鐘、の、景、家、に、縁、起、一、舟、鳴、を、山、や、と、先、在、今、指  
と、善、よ、む、と、こ、こ、其、間、更、物、と、を、ま、ま、と、九、九、九、九、方、を、ま、ま、  
こ、こ、の、園、に、其、景、鮮、明、深、し、と、織、塵、を、留、め、了、府、歡、す、れ  
山、無、數、の、陸、谷、脚、下、に、起、伏、の、巨、清、の、如、く、細、連、の、如、く、  
如、く、建、造、教、養、亭、山、村、水、郭、其、間、と、然、綴、之、川、流、駛、り、  
田、畠、拓、く、早、穀、種、と、奇、なり、園、中、に、鹿、跡、の、新、道、開、道、碑







と誓神社に言ふ有る古祠とし明治七年に其の関を推  
今存す此日可假築して觀たは三つなり境内位は廣  
闊なり樹木疎疎空しくして僅に数棟の殿在るを之を  
若くは謀りて再建の事には然しし中迄に社抱の棟梁  
様棟木社塔一隅の地徳に風打雨淋特は腐朽の氣  
さいふも~~也~~古祠九百年の故の境也と見ゆ神靈血  
食すを惜ず抑も之を河入る善く歸志す乎真  
と誓神社に言ふ有る古祠とし明治七年に其の関を推  
今存す此日可假築して觀たは三つなり境内位は廣  
闊なり樹木疎疎空しくして僅に数棟の殿在るを之を  
若くは謀りて再建の事には然しし中迄に社抱の棟梁  
様棟木社塔一隅の地徳に風打雨淋特は腐朽の氣  
さいふも~~也~~古祠九百年の故の境也と見ゆ神靈血  
食すを惜ず抑も之を河入る善く歸志す乎真  
と誓神社に言ふ有る古祠とし明治七年に其の関を推  
今存す此日可假築して觀たは三つなり境内位は廣  
闊なり樹木疎疎空しくして僅に数棟の殿在るを之を  
若くは謀りて再建の事には然しし中迄に社抱の棟梁  
様棟木社塔一隅の地徳に風打雨淋特は腐朽の氣  
さいふも~~也~~古祠九百年の故の境也と見ゆ神靈血  
食すを惜ず抑も之を河入る善く歸志す乎真

羽黒日旅中不快無天  
旅之  
甘藷を奴輩の  
面に唾せざる

館は緑樹陰森のり設け履を敷棟渾潔にして直に  
眺望せし佳しと海澄は梧松の翠を疑し一徑寒之迹  
の跡沖より遠く望むは房総相互の群飲夜色櫻糊  
舟にり神備一盃望潮鏡を懸し月明に星稀に露  
氣中天を横り銀河一途散りて夜窟空に在り鳥鵲  
南の起る漁船を捉歌ふ可等の風改むや  
厭ふ言は陣室、鮫達西半酒帯は放歌流  
浪の醜聲を校し樓婢を捉へ醉語を聴かば  
何れもに我は興の幾分を没せしむや 船は南方野馬  
の跡を踏み此輩の跡を封つを得むか



羽里曰此等鼠輩皆  
無足者耳余輩雖瘦  
而鉄脚一對以可游於  
無足輩不可致處也  
山伊香保是下景月  
阻付慰更手而投彼輩  
亦不復嘆

七年前途暑旅行即此旅行し函山伊香保甘んぜん紳士  
輩のたゞに歸り世の物價佛と騰貴ししは書生輩は  
皆房南の事とて此家流に軟み初め此長岐日とて  
長崎より此の海流の成ふよりして風景は數倍あるは  
忽ちに評判を島の昔には深しは燒く此の山分のみありしは  
此の大原古樓敷然として建ち紳士と豪遊し又物價を  
高め形勢頗る変じ又旧日の安用雅醇の趣を以て故に  
去るや會書生は到底長を滞在す能はざるを天下の  
名勝漸く此鼠輩の占領に歸し可惜極味を没了す  
に是は嘆息の情也故に余は故を擧げて之を収むる詩

諸君

三九日舟楫驛を以て丸尾は昨日より小病なり故に傳  
ふれ行徳に赴き舟に乗して東京まで予等中山を過り鴻  
臺の山を先きに書を發しぬ官子と齋藤とに此に出で  
此を求むる此の事と物色すも得ず

鴻の臺は里見義家此保成康の敗れ外地位江川に臨  
み新岸より此の山を樹木の上へ登りて天守臺の田邊不  
権淺田新板穴石造る雅漢井等の名蹟あり其他誰の  
天に申し誰ののせしむ此の歴史として考ふし又新岸の下に  
鐘の湖と名を借り功不潭底を知らぬ里見氏新橋三重寺



鐘を奪ひて軍鐘を用ひてに深き湖に沈没せしめり  
名はれしと水にの義心之を向上せし試みしは終に徒勞に過り  
と云ふ堂上に慈寧寺有り金碧漸古特に飛鳥せしむるの  
状を多す寺廢多し古書にたりし寺あり離俗を極め  
鴻堂の遺蹟を舟内せし寺廢多し古書の南部は今教導  
團の敷地なりとせし教を傳す想ひを秋月皎然と相用聲  
堂上起り空潭魚説の起舞すといふ  
捷路を可し里を堤を出て一既橋を造りて示す今管下は近  
かに事しし予が行や後れし人に還りしと云遺憾の仙俗  
を存ししに別る目を經る二十、道程二百五十里

七、大港の起景

月日の過なりしは家老の手書有り横濱に某氏の許に赴  
きて暇をすむる、金法に可く旅をのりし言ひたる水  
は流軍に乘りて起き旅判り及に相なりと談議あり  
三人を待て葦中是より、寂宮元とらに牛山の水改修  
すべく北馬南船の費より老しまれし心も勇み輝してまが  
彼方はわしのに引く出ると今宜くおは御りあといけんけを  
を多し知人可れば是が可にむ起し能れをせん無きと云  
町の角にまくりし家老に引くに一西軍前に回つて来し  
この向しが脱氣に定へたのみにしては知らんをいふら











無韻の詩 瓊々  
詠す

神奈川より輕井澤まで再び及部の町まで行く世間  
人家少く知る離居地前林を伴ひ夕暮に花を  
目に白く一灣に潮漲り遠く大湖の如く時魚躍り  
寂宮を破る河此に月を透して星明かり露氣江天  
横より秋氣胸中を透る此は清涼の景爽快景に似る  
言すもよし  
野を町を經税関山の上此地も税関官舎の河邊塔  
や心知る移轉して数下の人家数礎撒けり破屋付し  
満自善園端して寒草蔓烟の回を埋返し蟋蟀秋  
の叫破し凄涼の極寂寥の致り

山の最高峰をこえて峰を越せば全市盡く脚底に行き一  
株の煙氣東をて萬家の屋頂を覆ひ4株の瓦斯燈電  
氣燈はのぼりて照耀し煙を不戒の如し港自を望むは巨  
艦大船舳相衝み戦として山や小燈の如く燈を水の上  
出で水と相映し天上の星が水上を輝か明滅して波間に  
西方の遠く烟氣紅を垂し弦歌聲傳ふは此是れ水真金町  
とて遊樂の地なり折ら陣の飄風吼也此に吹来  
り衣袂を拂ひ颯々聲をなす嗚呼此風市中の空氣  
を清浄にして朝にまた人の胸中を清浄するも此何ら  
ぞんか



萬民の夢は正に國なり大港十餘万人皆眠の中に  
何れ此等の人も皆利益の福を願ふ人なるべし  
や何れ機心の爲に左右せられ利益身を縛し業に個  
の因として世に何れ利益は彼の獄舎にして機心は彼の者  
守に似たり彼は呼吸するの肺を有し循環せしむる心臓  
を有す然れども彼等は死せず心死せり  
鳥乎此謂之明なるも一面に機心は利益を充ちたる外に  
然る最良者鄙陋なるもの充ちたるに似たり又  
明は若干の令疑して死せしむるに似たり鳥乎此謂  
之明なるも罪深しと云ふも哉

彼等何れに此箇中に何れ紅塵を天地として自任して奔逐  
す嗚呼天の斯民を憫む最良の彼の陣の飄風は活  
機を一掃し邪毒を消し安んじ眠らむ機心に夢をさせ  
しめ而かも汝竟爽氣を呼吸せしむ彼等は思惟に迷  
て天の尊厳を知らず彼等の愚毒深なる実味をかし機  
の毒なる者とは實は彼等の謂なり矣  
山をどりて真金所は青樓紅閣相連りて雲霧起り  
哀竹咽ぶ道師有りて劉郎夢想見る者も巫山の雲  
は瀟湘水の袖より起りて夢を載せ楚臺の雨は窓櫺  
の窓を打も人知らず何者の游蕩をむ今ねは快



樂を得る者は昔首の銅臭を悪む人皆臭臭を愛す  
一は此臭と醉ふの精神の妙用を失ひ人回りの理義を  
破り道德法律を有能するに似る嗚呼いつ世に於て人  
の如くは此の●●なるものを是れ此臭に酔ふる者たる  
也必せり矣

不正の身動は多く夜を以て夜なるも陰悪慘澹と氣  
象を帯ぶれば自然と勸誘する故なるも真善美の三  
者は宇宙の靈光なり嗚呼何人此を捉へ人回りを  
善く衆生をして不滅の光明を仰ぐを得せしむる善言  
ふ太陽の如き如きは何れも此三者の赫々と照曜せし  
限を

とはたし

去て遠くはるる冬船の鐘聲を以て此の時を報す  
教は此の時なり萬里を烟濤を起へ一舟を冷家とたし  
まると此の時なり人皆此は一事なり

此を轉じて伊勢山に上り備へ付けし榻に臥し如故  
此の微睡するに同じく山鐘ひき惚然として起せば正  
に奇蓮葉の上に曙光を浴び海氷色を霞み此の宿車をた  
し又舟の山色を浴びて如故は一線地光同様に白昼  
を萬里にわたり天地快活となり此の家洞に於て世界を  
のりたり復たせしむるなり



街頭よりそし車を擁してすから実待せし車夫は燈籠を  
消し、園の隅にたむが起臥する日用の勞働者は木柱陰上  
り起すもまごひ寝やらし人食ひて侍車を行き、馬家皆起すこ  
そ世の業をなす朝の景家自ら活潑に地なり  
大港の粗業は自ら此の唯教祭の不元合も短き時同平  
とる改みねねるいふ何れも早業を朝咲く意威  
の家を築かし朝釣をものしつれ自ら東系かゝる此事は  
し、餘りに利にうよ事をも何れ故人多徳す我み独り后  
然す此等今野ふなつたや、園より時の好可心と観え  
こ然るふ

八、湘中の七蹟

帝都にゆくと旬餘にして月日といふに旅支反しそ  
借きとは、何の常念丸尾の二氏を神名代産なり、小  
野亦子と平塚とを合しこれより昔も世もさし  
古山より流るる河川謂大山街道なるものを、多摩川流  
流を流れば早や神名川なり也なり、是より上陵起伏流  
遊登り上下概ね段段して人家十數軒、死七村三流をたして  
山阿より別には是をいふもたし、野亦、まゝ十三里の間  
併り早坂をいふれを園とて其実を推察し得ん  
なり







樹蔭を<sup>て</sup>茂生し深遠にして且眺望を富み大磯平家の  
西端は脚底を分明して海色碧鏡の如く大島の煙を欠きし  
山歎と高嶺を神北河全碧軟損に寂寥として幽深山嵐  
鈴索を動かし陣聲 ~~響~~ <sup>ひび</sup>く

大磯の町を過ぎし鴨三巻を討ふ国道の左傍に河一堆の丘  
林をたし老松蟠屈嵐を半雲を時南に相洋の萬里の碧  
色を望み傍に貴殿の別墅を到わ棟を帝の風色自ら香  
礪をり丘上に西行堂有り圓位法師の像(又覚作といふを  
おし其左に虎子堂有り圓位黒衣をた虎姫の像を置く  
甘泉なるは別ち鴨三巻として寛文年間小田原の俳士宗

雪の營み建てる所とて故伊勢の陸士三千丸は兵に倒れして  
鴨三の碑を建てる葦原に抑えて、もまたばし守りまりの法  
でて火にくらぬ姫をともいふ水法に二六嬋娟の處女を  
酌をさるむ抑て寶物を見せむと法にば姫いとしつゝつら  
況きすや西行真筆の短冊西行の古木像なり有り又西  
行の用ひし杖なりと見えしは長き杖餘りの女竹として其先  
<sup>は</sup>まほうけてきらめしは彼の形おのりに魁偉長丈なりや  
又彼が牛山湧水を流涕し以りて嶮阻の路や歩きし山家  
推之茶の平にけりほかに西行の牛筆なりとも何やら正物  
本の断片に一冊ありを示し姫は之を納すこゝ小笠原生法



の讀本よむがし又一行がば処より事し折式を隠士の巻上  
相の宿を頼みけるか世老の柱なりと一木を示すに如慮なり  
といふは(國)に生ずるものにはれば南洋何れより漂流して  
まゐりしものならむか

古人の墨蹟往々  
にして假字を用う  
而もしをを以て  
死木とすは字  
に因りて意を解  
し、意を索む  
ために美を犠牲  
とすもの、しき  
は鴨にして可なり

この澤の林の教人、今會考する之に比して  
略の起つた子出たに西行の手筆には假字を  
サレ余其某の説をすはしにしきは略に何ぞ死木にして今  
以て塔塔と云ふなりと今は奴まより地執を足小は那外教  
十歩の如に何れも塔塔をたの何と様な地なり是説を解  
すれば形を木とすはし心も死木均しくして洒然超世塵寰の

外、蟬脱せしよし秋にかな懐遠をを親田系とて塔塔の  
間にきて冥想すれば又坐るに人世の果敢なり思ふもた夜  
水なりと意をなえし真か偽か余は初に頼しに廿建説な  
るを以てに標記すのみ

国村津酒白を返り年時れ中田系に著すは日身執殊に甚  
しきを以て執無行は明のことに道と野田鍬を投す鍬は浪  
浪の東都に行へ海上送する十数回諸友皆あて市中  
を足物す余は去歲之に故獨り華正月の夜を指しぬねたれ  
は鍬人施上りて番火を燒くしく中を過りていへり以て  
がらし



首早川を過り石橋山といふは河津より里道の右傍に  
小石碑有り真田軍標の意を公に上より其祠有り頼房建て  
とてしつとちばし此邊の地勢皆函谷の餘脈の峻走せし  
とて海平にあり灣灘をなし岬角をなし陸曲出に潮水環  
まじり岬の最北者には真鶴岬といひ軟朝東走舟に來り  
如く道路は陸側に有り甚だ峻峭と云ふも迂曲しや陸  
り附して是れは地盤4何洪濤澎湃陸路の存絶に  
心目を眩せんといふは和島を望み遠くは大島の相を望  
み雄濶の景象を望み相懸を聞くに堪へず之より吉澤といひ

九熱海

吉澤は山原熱海同進の大村とて海潮の打ちあする所其長に石  
を築き上り大道を作りこの傍に家屋は皆片側なり凡色  
絶佳東海の浪波萬古流るる書きし潮水清徹とて水底を  
真珠といふ近頃は游魚を釣ふべし暑熱に堪へず衣を脱ぎ  
泳ぎして涼を嘗

斯とて伊豆山といふ此が温湯なり驛端に伊豆山神社有り  
奴の礎道を上れば宮庭有り祭神は軒通実智の神といふ  
丙辰四月の創建なり元を志湯山東明寺を稱し上下の二宮及び  
三女の支切を領し同東総鎮守を辨し伊豆の古事といふ神領とて



現に鎌倉の地に於て最繁榮を極めし、東鑑にも伊三  
神社の七堂が藍尖上し炎熾天に滔ると書ねり、中世に三  
ふとく衰へし猶皇界の神も有し白影のほかに残りも  
改筆此は録を夫の今と表款して今に存するは上の部  
の又一個の神社なり、人の境内に松林の古松は龍津天の勢を  
神樹の老樹その周囲に憧むる車考が山邊、趣をたす  
別に神をたす物もほかに鎌倉右大臣か

早振、伊三御山の精、百鬼の色ははら  
を詠せしむ、七年は、伊三切ら有為轉變は死か  
と世の中なれや

此地古く古井持神の時鳥を以て着け、古歌詠みありし

五月園におり森のほも、松林集  
今にすまをわん、梅雨集

於世類甚、回雪烟碎雨の中、伊三聲の裂、伊三血と帯を風

と、伊三懐古、伊三帯の想、伊三花を吹くや

熱海に着し氣家萬、伊三棹に採、伊三流燈、伊三倚り、伊三湘、伊三藤を捲

子、伊三海風、伊三微、伊三浪、伊三子、伊三雲、伊三耶、伊三耶、伊三髪、伊三髻、伊三て、伊三を、伊三授

糊、伊三分、伊三総、伊三帯、伊三の、伊三ま、伊三鎌、伊三倉、伊三右、伊三大臣、伊三が

相振、伊三越、伊三来、伊三は、伊三伊、伊三三、伊三の、伊三波、伊三沖、伊三の、伊三山、伊三島、伊三に、伊三浪、伊三の、伊三る、伊三る

詠し、伊三鳥、伊三は、伊三白、伊三銀、伊三盤、伊三理、伊三の、伊三蝶、伊三か、伊三海、伊三上、伊三僅、伊三に、伊三三、伊三里、伊三集、伊三は

時に、伊三登、伊三へ、伊三む、伊三に、伊三左、伊三傍、伊三の、伊三伊、伊三三、伊三山、伊三集、伊三は、伊三一、伊三心、伊三を、伊三集、伊三集、伊三集、伊三集







阿之利能方比能可布知仁伊區流湯能余爾母多欲良  
爾故河伊波奈久爾

以上相摸溫泉歌後をも又は地を指しし物をもし其意を尋ねば  
伊喜相摸に属せしもの説は小治政より徳山氏をも三人將軍討  
即今離宮の儀在地に營帳する計書あり信に御殿場と稱して  
此事は杜絶せしし理に

熱海や佳ひしと日丸を御中丸と湯か行

後らるるも明治改政より十三年より十九年の間に  
非常の録筆を記せしも今も敷敷敷の儀あり其地を  
しるは世理書を教養するに難きに河原流に難峰半山之を其

温泉源より約二千年大湯を流る外は皆は湯を同にし  
或は尖嶺より通る或は沙層より流る其地海中より若干  
心ありと云ふ所は其地を大湯とて書む三つを對して  
余は湯を對長湯とてしり書む其地は御殿場と  
かゝる泡を以て様にしる名より湧き其勢左に流るる氣に  
執儀あり晴天に雲霧を流るる轉々怪心駭然せしと遠  
在道の白氣流るる此石室に勝り死を以て水滸傳中決  
大針の石標を極す百分魔鬼を逸せしし時を想像せし  
其地を以て段々其の聲を聞き難き事と云れば湯  
騰正と學して數言の大師首を仕掛地獄の釜の湯を撒







心第祖考り坂古地事と古僧天授年三月廿四日  
寺之園寂せしふ寺の前には清き細川のほとり控へかく  
燈道を踏む山には一株、老松古表と峰へ特と可ふ  
るは鉢甲斑さう味大幹の上を攀ぎ四方を西復ひ巨人の坂  
を破り佇むさう心なり此は味屋牛植の松にて昔の思ひ  
の猶想に地へ流すは新松也なるも高樹の地は南面を邊  
こころ大倉坂を眼下に控へ庭園は甚し敷散らさるる松樹  
さう古木を立し晚風新涼を運り爽と氣秋を味ふ寺堂に  
は陶製唐瓦像、控の傳衣經金七條扇、中興堂居園師の  
九條衣金珠の域内又と石千の碑碣あり

日、朝夜可き二島街道に流る少しく坂を上げれば老樹  
森とす樟下に祠堂あり末宮と云傳へるなり銅年同株の  
樹根西に漢を網羅惟り何と葉たが再三網羅を漢文を  
三を揮派漢松樹下に富きまたさう雪に漢文をよけて九月五  
十徳命寺り山と樹の揮はりの浪音少海と地有りて茶茶茶茶  
凡守後神をたす時を頼きまた社と七樹の揮は暗地を今傳  
り二株を存する大なる方には空洞樹の数を全せしむるこ  
未來の大徳公のいむる美之石橋山に敗軍す如く河らば此  
地を案と居竟り臨れ家も之の樹周三、五人許り河ら  
び

羽黒日野西海路哉



此の近傍に公園有り天然の景致を以て或人の為とが梅  
桃を種し此に不見し其の香も熱海味も見る日屋山の秋  
にして十国峠を連り較る多岐<sup>い</sup>が一面の先山あり紅曲盤  
廻るが要因の路をば道幅ひろく此の捷路有り土砂乾燥  
煙塵を起し起る聲澤長澤澤を至平井よみさきより大  
折し重車行も丹那村を音鳴鳥不<sup>て</sup>こ音聲を反響し野鳥  
又雀を多し奇なりゆき神在は熱心は佳き見むせし路  
今も東の山に止みぬ区に石怪勝して佳歡を要せたり平  
井より新し仁田より並山あり若し夫れ錦浦如島日金山の佳勝  
に云はば他日緩之地に遊覧するの期ありし

十、満目の古蹟

並山よりまを望み平野田勝越え遠く望み稲穂微風を浪  
を布く而して身は日本中古史一幅のバラウの中を行く 某山某水  
其夫を清き指點し其名を問ふに史に著る遺蹟なり  
ゆきゆく歴史の感懐は油然として起り 其處に往き我が懐  
きた渺とくも夫に倚馬千言雄才をひき下此の景も觸れ其の  
泳懐を遣らしなほ無情の山老水色も段の光彩を注し無教  
英雄の涙眼を留むるの靈境はなむ佳し 余はの不才な  
る情むらば其仁何んぞ折角の古蹟に對し 優孟衣冠をせし  
塗抹せむと世に是れ懼る



並山の家敷越し其東側に一帯のまり山麓遊して此を  
首尾守懸し死せし常山蛇の如く金湯の状儼然 源氏 是実  
小龍城を北條氏の古城跡なり長禄年中伊勢長氏一劍  
杜りて四方を飄淋し遂に此城を得西朝を倒し成盛を母侍  
ふの身をもたしぬ天正中後遠英毅の北條氏規も亦此に據り豊  
臣氏のたすを抗し舊戦固守し國を六ヶ敷おの徳川氏に川氏を  
以て相合せし美談の所謂大帥左衛門下より此山を相合し久天  
下と為し今の美武なるもの猶ほ此地に住し松平宗子と建永  
の子孫とも重傳すふ人伝僅に九十九年飯食はむせしと云ふ  
と此山にあり

龍城の東端より常山と云ひ上は青松馬鬣の如く山崖削  
壁し色白く粗鬆くもの是一格古地なり今山木に於て  
林中小物有り ~~兼隆~~ 兼隆を祭ると云ふ大願心の人止業の  
碇頭兼隆に曼用いし地が藤景康が軍中と思ひ方難刀を  
以て兼隆の首を切り燭を移して障を燈りたるは遠く烟  
火の聲かきと指し首級を提せむの前途下すも也と喝破せ  
し也  
常念谷酒造の宅を越し其知人望月某を呼び中ひ来り蓋  
し余等も爲に蛭島を案内せしむる西南の方には山脈有り其  
状怪奇直ちに判別す其下は此條村を以て時政の館地なり



此不

輕島は並山あり、輕町田隈甲に佇、遺跡を以て、遺志  
世に傳へし、此野水は、橋を架け、爾後、湫に、極りに、見ゆる  
世に傳へし、此野水は、橋を架け、爾後、湫に、極りに、見ゆる  
し、此、空甲の、雲は、大旗の、如く、樹下の、凡は、金鼓の、湯に、似  
り、傍に、樹あり、是、望月某と、分れ、修善寺、方、赴く  
此、遺志、を、眺望、し、望、平、遠、村、原、に、樹、稀、疎、の、間、に、何、れ、炊、煙、を、  
見、し、北、に、函、根、三、木、堂、舊、跡、あり、南、に、天、城、り、前、面、に、常、に、新  
然、考、削、雲、表、に、此、寺、の、其、山、の、一、峰、に、坐、す、方、獄、宗、と、り、修、善、  
谷、若、此、寺、を、其、階、級、を、一、葉、書、き、今、河、成、上、藏、す、と、い、ふ

十一、修善寺

修善寺の、山、の、途、上、狩、野、山、を、渡、り、河、岸、に、峰、あり、此、處、  
修、善、寺、の、敷、地、に、は、湫、潭、を、造、り、此、處、を、以、て、景、名、を、數、に、  
修、善、寺、と、名、を、對、稱、す、極、す、淺、野、と、い、ふ、此、地、に、河、は、昔、と、古、に  
、逆、旅、を、業、と、し、し、棧、を、名、は、其、處、海、邊、の、余、せ、し、此、に、係、り、  
、本、地、の、地、勢、を、以、て、映、園、と、名、し、南、此、に、山、を、以、て、東、西、僅、に、通、す、村  
の、中、を、横、断、し、流、す、**○**、桂、山、と、稱、し、源、を、達、磨、山、と、名、す、東  
北、に、注、す、と、狩、野、山、と、名、し、湯、の、稱、す、此、の、外、去、石、中、流、す、**○**、  
滑、地、と、名、す、稜、角、の、形、に、似、たり、人、の、如、く、坐、敷、の、如、く、伏、し、水、の、清、  
之、に、似、し、石、味、は、雪、を、敷、き、急、流、は、此、處、に、誣、す、水、の、清、潔、の、如、く



実五其五、渡月、虎溪の橋有り、川の西側には法住櫛比  
に樓閣を築き、田家山（山）にして俗素雅味有り、四時景  
色に氣象万千回有り、款へく錦衣代、歴々の事、實に聯  
帶し、七蹟は世に存し、馮常懷女、病を癒すに云々  
樓前に獨鉢湯有り、試に浴す、桂川の中流に漂出の船名を  
難む、湯拂の石板に舟中を劃し、湯の冷温を分る、舟上  
獨鉢の石標とし、傳へて天明年、修善寺の住持大辨建  
つ所し、此の記を案するに、空海大師に錫を留むるは、獨鉢  
を以て穿ち、得病を醫するを、（按）里民に佛法を教へし、空  
湯は甚く、河水を以て調和す

衣を以て織、月東山より涼風颯々、浴後漫歩し、修善寺に  
至る、高岡有る、古刹にして大同年、弘法大師の創建に傳、其  
後建長年間、宋僧劉圓溪、事生に臨濟宗を行ひ、元僧一  
山、諱せんと、素住す、建治中、隆溪、曹洞宗を行ひ、遂に今と云々  
唯、南北朝、（同）空宇、頗る發熱、（按）早雲、（按）担文、（按）紹興  
乙酉、興じ、杜散、（同）に復す、（按）得り、（按）此寺、（按）寺、（按）三十八、（按）を、（按）受し、（按）文、（按）年  
回、回、（按）尖、（按）之、（按）罹、（按）空、（按）宇、（按）瓦、（按）樓、（按）に、（按）歸、（按）之、（按）曰、（按）歡、（按）長、（按）く、（按）渡、（按）下、（按）如、（按）今、（按）實、（按）良、（按）規、（按）模、（按）固、（按）より、（按）少、（按）も、（按）域、（按）内、（按）蒲、（按）西、（按）堂、（按）宇、（按）七、（按）雅、（按）獨、（按）ほ、（按）久、（按）し、（按）七、（按）氣、（按）の、（按）經、（按）聲、（按）、（按）其、（按）蓋、（按）の、（按）音、（按）響、（按）相、（按）和、（按）し、（按）之、（按）切、（按）、（按）此、（按）靜、（按）の、（按）趣、（按）今、（按）肺腑、（按）を、（按）爽、（按）た、（按）す、（按）也、（按）



寺前の書店まで寫真盤を購ふ桂太理談部を博  
しり婦收燈下を講事申す地は必讀を記せし今之抄  
出ず該著者は不敏の詩経中の國風の字も要すは成類  
の著る迄まは之を盡くも稚吹の音と經中へ終めらるる長江阿  
り蓋當時の事情を想見するに於て却て信憑するを能はざ  
りし此言大なりし也物知る者 よる

一、鎌倉の麦搗歌

鎌倉の御所へ庭へ椿を植てさだて、日が照れば涼みどし  
雨降れば雨やどり、

かきらの御所へ座敷へ、十三女郎酌に坐して酒肴も看せりも

十三女郎が目つゝ、

かきらには女がいと、猿の夜衣を搗き、猿三正十杵が三承  
と水も純子も掛ひ、

かきらへ登き道に、敵討か何とて、うら疑は十三子たり、  
うた、姫は九つ、 青琴曰金吾等在解不解之間、

二、天竺二(全上)

天竺の機屋の娘は月に九反の機を織ら其ほたき切て晒らして  
紺屋へやりて其様好む、宿先は十五夜か月の、涙をちまき其処  
西御は鶴と孔雀と、羽根をひ合して舞ふと、帯しは何は短冊  
おんをさすも其処、上まは鹿めつれ、鬼のたびをすそつと、

詞集曰不可解不可解







龍頼の死所疑  
小一、武州金澤  
鐵切岬は大靈寺  
あり、龍頼の古墳  
を叢草の中に  
定んず、土人の碑  
に「龍頼伊豆  
より追われてこの山  
中に入り、里人密  
に僧と申し、寺  
に匿し、以てその

示す龍頼の碑を吊ふ遍承の北三四町、小山を以て所里  
小祠を建て、晴神とし、之を祭る、其不像、免服して、矢を  
持て、儼然として神体、修るを以ての故、たゞ、彫刻、粗拙なる、此古  
雅、殊に愛するを、魁、龍倉志、下、據る、薄、御、曹司、位、牌  
石塔、鐘、倉に在るを、記、首を、其、此、二、葬り、と、申、未、だ、詳、な、ら、ぬ  
と、行、左、水、池、に、其、軀、を、葬、し、に、や、未、だ、證、據、を、得、ず、龍、頼、を  
火、を、焚、き、自、ら、省、て、死、し、景、時、首、を、伏、櫛、に、得、て、鐘、倉、に、置、り、以、て、故  
必、に、左、道、首、を、葬、し、と、す、と、武、は、其、の、無、義、か、ら、未、だ、日、表、者、伊、豆、の  
人、志、城、魁、自、ら、鐘、銘、を、撰、し、神、を、以、て、此、以、て、頭、骨、を、埋、め、し、知、す、其、後、知  
る、能、は、難、し、薄、心、地、下、十、畝、の、寃、魂、聊、か、慰、め、ら、れ、し、

短生涯を終ら  
しむ、村民蒲  
姓を冒すもの  
甚多し、此吾  
親しく親と云  
發して以て他島  
左券とす。

太平村の、旭藏と見らるる、重有、南方に、河、大、流、下、三  
十、幅、五、尺、なり、偶、々、天、旱、涸、し、涸、滴、た、く、不、能、流、ら、に、軌  
子、も、み、つ、る、と、漢、水、決、漲、の、時、な、ら、ば、奇、觀、一、し、ほ、か、ら、し、思  
け、

修、禪、寺、を、歸、極、家、を、辱、階、回、形、粗、末、なる、十、六、五、指、で  
表、向、に、延、美、将、軍、左、源、賴、家、を、生、誕、し、刻、に、左、元、久、元、年、女  
子、甲、子、月、十、日、を、以、り、假、然、を、建、て、之、を、廢、す、武、は、之、を、是、德、表  
也、と、し、埋、骨、也、其、修、禪、堂、其、基、底、なり、真、偽、何、れ、を、判、じ、難、し  
不、同、支、干、月、日、は、定、ま、ら、ぬ、此、古、の、日、なり、鳥、呼、當、年、西、朝、の、  
源、将、軍、魂、石、饅、頭、を、以、り、搗、刑、の、中、に、埋、在、し、牧、童、推



堅つ情を忘るるか一箇懐古の涙を感ずん

左の山茅菴を指月庵と云ふ當年心は厚く此事者持  
用之此茅菴の骨肉枯流を持て難く月子対し鳴咽せし  
釋迦の坐像を安置し其下に石造り老中蔵する此尼が般  
若性此像は此の切達若干母有り云ふ自來衆多源泉  
下流に金瓶香流香水寂寂の風天離離河等の荒蕪  
其傍に安園と云花苑有り自在の觀變を牛す  
地は也此種古蹟の著明なる故徳と見せ昔に邊  
と云ふ此より田子自の故に正覺院と云ふに興院と云ふ  
信禪寺西幸年持の上流河情壁有り溪河に臨前

一境をよむ家の老樹林に暗く深淵空海の像を安す里俗  
傳へて又師密呪を信し魑魅を驅伏せし此の云ふ今は教範  
の茅菴に持腰打ちを徳に僧出で事と云ふ清淨山  
の權也龍軒長日深山の巨松を欺り眼光同紅岩下の電  
し金寺の洋服を看みたる見の兵を為し此に信者も逃懐し雄辯  
酒に満ちて居り自ら言ふも長州の人にして信者も松前表  
し轉戦し丁馬の從城山に凱歌を奏し其外の高野山の雲並  
に符を身離す終に生を合し佛恩の賜を多し感し面  
に松前同河の友戦死せるを面りし見轉く人生悲酸地す  
終に桑門に歸依し此の困境に餘生を送り其院に生せり戦



この宝鏡は宝子目初ら推し又觀世編みの年津を逢り  
此の山山の効用西南の山に建て賤城の兵  
を拓く事對は家裏より決し軍を起し捷しと評する言分  
たれば勝利必なりと云はれし自新し滿院の津風爽  
新を年比橋に倚り年時をさし回日漸くゆるく輝くとき  
こも遠望山なる甘酒清田峠を越えり上り眺むるは佳景  
藍嶺の峰山脚には河を駿河の津畔に集り漁村並に在  
る陸の山影を削いで田子の浦波々映し三浦松林は津波を浴び  
水糸細く控成し東西相控は燈籠相控柳舟に下流は嶮悪にして  
前林茂き岩を刺し推し難く舟行ふも此には名は  
なりかた田の漁村に遠し舟を御津に航し深表船下す

十二戸田

伊豆の地をめぐり景脈をたると然も君澤郡正白塔津波に  
比ぶるとし津波は半島を長く延び半島津波を為し  
狭くし裏の潮水涵碧穴湖沼の觀をなす  
保養館津波の上り履金津西津に人を院はし  
半島半松柏帯の樹林系と奇岩怪石存するなり仙臺  
の地を樓上登ればは河津の内外を望むる美談分峰  
止此に方々津波田子の浦と臨み三保の松林と聯り東に遠  
摩真城の西山や西南駿遠の群山並走し津前甲を水天  
類類の同は望む山海の眺の西なる偏り相映發しと畫







木村海霧感里水光點然こころに於て身の異仲に流寓  
すを感し家と信ひ友を思ふは林に難く轉轉反  
側道下輝く流けり酒を呼ぶに樓婢を乞ふ  
既に書きこころに鳴呼風光佳絶の地とこころに月白風  
清き秋の夜をこころに餘りりて一か蘇氏の  
婦の酒を感し燈を乞ふに燈を乞ふに燈を乞ふに燈を乞ふに  
燈を乞ふ

東京を出て舟に乗り身に微恙有り日暮我も舟に服  
胃を害せし者と思はれ此をたゞ特ん甚しく側上より  
數回短衣を脱ぎに海を渡るしこころにたてまや

十三 駿南

月十日午前時を以て舟に起りて端船より本船に乗る戸田一  
湾の曉色猶ほ模糊の中より御濱岸の松林は煙を吐きこめて  
團圓とて果し本船に近づき大なる日本形の帆掛舟にて新穀  
しく横み乗客を必に二村婦の船頭とて一人は櫂を把り人  
は帆を減らすなり 扱舟は帆を揚げて西を去るに折し曉煙  
漸く消え芙蓉の峰影を倒映し三原の松林は鏡裏に婦  
屋の鏡光如く西言布帆は旭日映して皆紅色を帯び東は  
豆州西は駿遠の群山或遠く或近く悉く翠色を流した  
り此波三つ海向は舟に坐りて席の如く舟行たが安穩なり



忽ち此風を伴ひ坂一層の迅速を以て鳥の飛ぶ如し快なり  
海上弦六里の回~~長~~奇回産産やたに舟は志しと清水に  
こけりまにけれが潮原ちかたに川はく可なる故に海潮流  
れ早して舟を看くらんとしふ二時回程赤く大陽の下に  
午睡し午後時漸く山阜に着るを得し

清水は世川の河を以て東海國道の南所、然るに市中は高  
家旅は柳比して稍盛盛の状を呈す余先きに田を獲す  
時朝平の辰折の比と持て来しし位、病氣を局食氣す  
ず故に是れ食はず唯渴に地へ此を水しと飲み大  
勇氣を回復し是より三保に向ふ

三保の松原は清水の南半里、忽ち東南より自雲出と  
る長洲にして白砂岸に連亘し一帶風光頗る佳なり東此  
の方舟絶た富士を揖す然る年男を年曲凶を平と  
芝柳の陰を此のより殊明に名松林は稍扶疎に  
古者この漸く枯朽し其数を減しと故に松は皆  
古幹掃居せが河を瀟洒ならぬは遺憾限なり海濱  
に古松様有り羽衣の松の樹下に碑を建つ田子浦  
波瀾を以て伊豆に連り今朝来し跡の舟路は歴こ  
して見るべし日漸く薄煙の起るや景象幻轉  
し一段奇趣を添ふ又三保神社に詣つ



是より路を回し龍華寺を以て法水の南十数町一山半  
腹に寺域廣敷にして山中奇樹多し秋中最大なる蘇  
鐵トは一株數十丈あり強し奇觀なり外に又大なる西朝王  
樹あり山海の望最佳にして一帶青田眼なり清見瀉萬頃  
の水は潮光濃碧琉璃盤ハの如く群山層巒起伏連亘し英  
芙蓉峰は正面にけり蒼亭に坐す之萬三千仞の夕  
陽餘照を散り紫色をまじりてまほしき美也曲岸の  
が立同社言に松柳畫を添へて洋況に推して望獲や可個  
所並に服部法齋三景略記を著して此地を以て天下の絶觀  
とせしハ法觀音寺肥の宮原寺之次と云りハ脚加温美の

浮言の非なるを感ぬ

是より久能山に宿る凡之軍半許も其同日少水際  
の建り右にけ御前岬を觀左に伊豆の青山を望む之を  
有渡の瀟々海邊と此地大なる蜀黍を植へ天旱なる故  
水を汲て溉養舟輾轉の聲軋ハとて御音寺土歌宜葉と  
抑之能山は推古天皇御宇忠仁ハとて國守觀音を也還に  
彌陀原山久能寺に彌ハとて室塔ハとて世に世に先を行基  
楠木を以て日夜を像を刻み添へて益々大寺となり切舎三百ハ  
有り聖國克難を以て善知識の室とて是より出でて水録十  
一年武田信玄此園を押領し堂宇を村松御移城を築



きり元和三年徳川家康の遺骸を山上に葬り墓前に  
祠を建て飛遠骸を冕山に移した及び猶ほ其靈を留る廟  
貌儼然と不世を登ると十七無始の外にあり猶ほ攀  
登するに十数回にして社前を以て社殿は社殿を以て結  
構見ざる者多し鑛すに金銀を以て法言に丹朱を以て彫楹  
珠柱を彩燦然として人目を射る満目輝輝静かにして自ら遊  
の遊り更に絶頂を上げは貌然と如く山初は後は新産絶壁  
高を數百丈実に入城湯池の天陰あり午を昏れして遠望すれば  
南は渺無邊の大平洋を南に東北には江山を隔て富岳の雲  
端を屹然と望み北は瀧水港に三條の松原を以て眼下に河

りて自ら遠近の景を眺む瀛車。烟小舟の帆影初に遠河  
の流に以て畫圖の如く本所を以ては  
山を以てはしつ途を以ては此より三里静岡を以ては九時頃なり傳車  
車場前其大旅を投す此に静岡を達す途中士女終年  
に織を以て或は田畦の間に席を設けて坐する所氷を賣り  
行路を以て強がし難し雜沓紛擾言はれ方なし人々の心は此三田村  
に於て軍神祀のあり大祭の折に大喧打擡げんを歡む  
が爲に人が集まりて心ならずも喧嘩然の聲を聞き  
へぬ  
十日朝霧を以て園に以て賤橋山の南極處に河樹木



紫雲清澄坐と想ふく泉池行 涼風清連を拂ふ  
清河神社何木花岡耶姫を帝の総持神部神社とを  
貴尊を奉り共國幣社なり 社版は丘陵の下に鎮し三  
保と礎を造り礎下に三里岡河棟宇高と半空に塔身を  
を多樹河は神は龍鳳を刻み精緻巧麗を極め実十日  
東美由の神龍あり岡前に紫阪り長都之を圍み直ちに  
樓門と接し礎を躋し書して本社と云ふ 結構輪奐美を盡  
し飾らば金翠を以てす益軒白の日光山東慈願を并稱して日東  
神社甲の長し奉りありを造りて実と理と思はるかの山田長政  
の奉りて進回難敵甲の歎し此櫃上に野々しあるがいつの地を

ッむ舞馬の以て子羅りて今は性と其寫しを藏し是は詮談  
こと実易に人い示さすといふ  
之より賤穢山頂とたゞ古へ青雲と同と稱し今川義元が城  
地河満堂青松を生し輝き聲涼風と和して法し  
今朝たは霞夜を拂りかへ賤穢山に秋葉にや 法持寺  
畔を渡る四眼界を遮るる多 眺望豁然として西に安徳山  
の長流を俯瞰し北に富岳を仰望し南方遠に有渡渡十  
數里長河曲浦の連を歡千里一望の快行 二前將軍の邸宅  
に坐し兒女此邊櫻花を喜風駘蕩の候に至れば士女を  
花を遊し綺羅の天地を現出すといふ



公園を出て教町に臨濟寺と號す寺は大龍山と稱し後奈良  
天皇勅額の道場にして今も其元創建の本光國師と開山と云  
彌長元の時始り成り現在の方丈は天正年間空律教を奉じて  
此寺を創り寺域廣敷建築古雅にして瀟灑にして寺中に  
田邊平の山室有り天井に採山龍畫有り空律幼時今川氏に  
寄寓せし此室に於て二世大原和尙に就て學を滿せしと空  
律今川氏鎌中村氏の傳記及義元首領傳し空律を元在  
離僧也云々一箇物持見しと云は折師也乾しいと書き出  
ししるべし在れば憲皆見玉ふと指説す今山徳川時代の  
と書き最も多し石札に白と對照し芳名を喫し開法

ること教刻碑と歸る川外の野風涼を送り紅白の蓮花  
香氣也外と溢る

靜岡は實に吾が此行西極の地なり即ち東に志し駿府城  
下を過り東海國道を取る靜岡市外坂のさまは每處皆大  
年と見定むが前年大丈の爲に受けし瘧疾の痕は未だ今も瘧  
の面を見へし江流も余年より七折すること十教町草雜  
の祠を過り日本武尊を祭り此の鎮守なり祠就く物七りし香の景  
樹の中堂に記に此地を以て尊が劍を以て野火を雜き清しと述  
邊境なきに記せも燒津の地こそこの所なりと説く何れ  
は未だ確然定む難し江流より先方教町處に林葉の祠



に河試に河の山日登臨せしが一田多風光愛すも様  
に愛し

龍山登るも欲し路を回して明たしねは打ちやみゆめく  
と興津の清見寺の須づ老樹の生茂り亂蜂風に響き  
爽涼比古し寺庭敷の地は丘上に南に一草平の水を隔て三  
保の松原を望み清見瀉一帶の砂浜には巨志石の浪潮際  
に起伏し林檎青の車には伊豆群山実地し三年と相對  
して海をも西には丸清水の談華寺久能山の懸橋を觀賞  
寺の崖の愛宕の年高の山亦觀眺の間に河廿餘年と望  
岳第一の所をす然れども曲亭に宿は之を却て龍華寺を推して之に

へ以て九鼎大なる重きを歸せしむり而して世まが彼れを知らず  
の偏に此に著るや余を以て之を見れば清見寺の白岳は佳なるもの  
に然るも眼界の寛く嶽の位はゆるしは談華寺の老か  
ざる者なり清見寺の景出と雲をまはり然れども遠に談華寺の  
更に雄大の致しむるは<sup>此</sup>徳の徳はざる也曲亭の言中なり矣  
此日者熟睡に甚しく體に微恙を以て困甚きを脱して  
終に興津瀉海の一樓を授す午後時頃より數回游泳して  
涼まの欄下れば三保の松林眼前に在り呼へは得に登る  
へんとす者なり首を色紙影を松の相友松下の風流して  
吹きまの瀉海數聲伊勢の橋響と相和し身は一幅の畫



み對するの櫻行

十音興津を夜し由皆廻り終は海濱にけり菩薩の龕  
を踏み歩に新道行り浪打の聲を行山には絶へたからぬあり  
果樹の中宮記に故に迂曲し荆棘を排して旧路の嶮  
試みしや記すを足れば旧路は昔より此の險せしむを  
吹上の音を理て蒲原の嶮を偶き神太字急の字子遇ふ年を抗  
りと相離り路傍のふみ踏し語ること良久し靴は東西列る  
田子唯登歎し山野木尾は田州より神谷は都岡より折はむ市  
谷には流り流車と来り歸棧せんを此にまりし由此の嶮に  
也若重表のり抗牛して我を拒は似れぬ心となるを此の嶮

十四 嶽の西麓

富吉川を流りて急流驛に來り左折して吉原より下を  
此は大なる澤道の屋河製紙會社にして富士の権を以て  
り園中名物有なり久澤といふに福泉寺とて此の  
寺は姑の秋成の愛妓跡を布衣の草履を踏むる跡にして  
今は小き假堂有り其荒廢の迹もなきなり其東に此の  
二回の夏草有り其里の輪塔にして鳥三の字は能減して  
弘安より其の寺に又三脚の跡に虎女の小祠有り  
又此村の浦上と云には時致の首洗ひ水元弟の腰掛石といふ  
るよしは此の記に記す



此日大宮に初神奉常念二宮宿也此宮少なり樓臺東  
此宮の宮岳の修葺を定む紫雲宮の幻のきよまの美なり  
宮の中に剛力を住む美言準備の明りこゝ西村鹿の勝也を  
心見しや二宮の登岳を成むを猶り又も勇むて臥ぬ  
十日前前三時登岳して夜し所の西端なる浅河神社に  
詣<sup>り</sup>一拜して去る此祠の淋縁起をいふは垂仁天皇の二年  
月本花園郡唯の宮を宮と郡山宮村と建て大同三年に至  
り阪南村磨之敷を奉じ此地に遷し奉る合祀すは姫の  
夫西村村尊父大山抵年なり貞觀六年五月の宮士山宮大  
此祠宮の破壊す山より灰と鉄鐵を雨にし穴の内宮也

此<sup>山</sup>に抜け嶽の西にけり萬葉集に母の海<sup>石花海跡名付有毛抜山之</sup>  
其<sup>山</sup>の<sup>海</sup>に<sup>海</sup>と詠ふ刻の海を埋み西村進の二山湖を  
ふぬ甲斐國のには大神の託宣ありて神宮を造り鎮湖  
この村の浅河神社の時成る爰に又刻湖の遺壇を於て出  
宮<sup>現</sup>しり<sup>文</sup>實録貞觀七年十月九日條下り詔して曰使  
者を遣して檢査せしむる刻海を埋むること千許所傳せ  
之を足佐平中最高に社宮を飾り送り垣に四隅行り丹青  
の石を以て其四面を三石の高玉に飾り唐や三石厚一尺余  
石を以てその相老ること一尺中三厘の厚く石を以て描(其)其  
彩色美話展がると勝げと言ふが流と此の今の龍宮に浄土



の<sup>り</sup>とあり此宮は神靈の威力を以て構造し其の典型  
を示<sup>し</sup>たる者ゆへに其存すること二三月則ち此を模して新  
以此処に宮殿を築むは昔中駿河國府に新宮を造り又規  
模是より即ち今の浅田神社靜岡に在る者是なり今の  
社殿は慶長九年家康國原の勝ち祈願の報恩として造營  
す所と云ふが神額千二百石生地社殿幾んどして頗る壯麗  
を極め百十間の長廊を以て~~し~~ <sup>す</sup> ~~す~~ <sup>す</sup> 宿永の山、中政の地、辰  
前後相輝ぎ漸次殿柱として下部を削りて社殿十二景ふ  
といはるる也幸を存し明鏡池、玉泉洞、神三山など昔の様  
を想はしむるに及ばず

訪り捷路取り大石寺と云ふ寺は法華寺の巨刹にして日興の創  
建に於て境域三萬餘坪堂宇夥多何れも大方は粉破し旧  
觀を存するは少く唯依然として五層塔の屹然として峙つて  
あり暗泉石堂に因り幽輝荒樹を帯びて雲河等の荒  
涼なや唐表にたりや石を活か酒を療し老僧と傳へる要  
対にして傳して去る

是より行きて駒留の地を見せし稀れある老木なり東鑑  
に建久四年九月日將軍家監澤夏符<sup>印</sup>見。為人と駿河  
の國の赴き同十者監澤御符のこと終り富士野の津波被  
り大津南面に當り其の假屋を建つと云りや監澤は今駿東



郡津厨町、原里村の近傍にして、高野の假屋は即此地なり  
今は白糸村狩宿の傍に井田某の宅地あり、某は猶若年の  
古書を著し、蔵に置きたり、此の樹は假屋の頭  
にあり、諸将皆此より馬を下り、門を去る故に駒留の石  
り、下馬櫓と稱す。

此より行くと半里、三條松經の墓あり、田畠の間に石片  
の形碑立つ、是れ鳴年史君子路に同邱なり、唯し去  
り、白糸院を見過ぎ、導者道を行、此邊土地較寛、坂四面は  
小山脈、圍繞せ、水清流淺、錦石分明なり、路

に、溪行、導者、半里、馬渡、澁と、次第、致、意、す、又、一  
溪行、前、ま、は、水、流、及、は、間、は、が、多、れ、り、此、も、或、は、田、隈  
或、は、此、の、昔、道、と、行、こ、半、里、對、嶽、の、野、早、の、木、末、が、  
乾、平、衣、袂、法、濡、し、ぬ、終、に、暖、煙、を、る、鞍、鞆、の、聲、脚、下、に  
起、り、一、身、の、汗、漉、れ、り、に、此、の、山、が、い、ま、も、下、り、潭、上、に  
此、を、見、る、同、は、も、知、り、白、糸、の、澁、に、行、り、す。

溪は、石、を、穿、録、幅、半、丈、且、若、し、ま、は、左、側、を、雄、雄、の、二、溪  
に、行、り、其、ま、ま、雄、雄、と、全、剛、力、を、盡、れ、る、が、如、く、物、連、さ、ま、ま、な、り  
その、鐘、音、は、此、邊、の、野、水、を、草、叢、の、下、を、潜、り、こ、此、の、水、流、り、  
こ、は、し、こ、の、石、の、間、を、通、り、こ、の、音、も、吹、か、ぬ、數、千、絲、竹、の、或、は、



曲折して壁傳ふ或は一河と下る細きり大まけり富き  
 何れも何れもなる深の底に集めて此深にけり故に深  
 は大小諸深の（註）集るといふ事ありて而して全体をまは白糸を引きみ  
 ぐして懸けさるる崖上には藤、躑躅、楓等何れも折つてけ  
 しきり別れてさるる眺めあり且又五月雨の（註）根せじは実子物  
 凍して悪鬼毒蛇の窟よとの想はれといふ富士満の者な  
 らば此を水垢離野の體を淨むるよし今はさるる勇氣（註）  
 唯だ然と打ち眺めたり信にたむしむる小石碑何れ  
 時とらぬ雪解の水が神代よりにはにちたる白糸の（註）流  
 のニテ字を刻む於朝仰牧狩の折御覽何れと

白糸をあわ緒を結へも激つ流れば年々もとまらず  
 この上に雪ある姫かかはすらむとふまを流す白糸の流  
 ちりり泳げり左の深の底に於朝の髪撫で水駒（註）影も石  
 解き石の杓子石（註）ふはし

水邊は痛の歌と云ふなり花し末は芝川よ海つ故に此山を水之瀬  
 といふ真芝川といふ古歌

夫亦集  
金華集  
 夏もなほ雪解の水は月冨へ凍りし如き富士の芝川（註）源全

石根を消ぬ雪も流すは月（註）みかきらふは此川（註）今川  
 ちりり水も流すは月（註）みかきらふは此川（註）今川



を産し味甘美なるは往古軒の家より三百枚を年々寝付代官  
所<sup>の</sup>將軍に献せし意を今もけんぞ唯<sup>も</sup>一枚<sup>も</sup>残を値す此  
不実<sup>なる</sup>珍品なり

此より八穴まで三里と聞けしが五丘地に譲り登岳の念に  
しれば同道を野の4道の中を推し分け夫天と曝をれ  
三里許歩み此山を徑て村山に上りては大官より登嶽の故  
おにありと一山村あり午食し一暫時健て剛力をして馬を  
赤い<sup>の</sup>雲の幸骨の遊をせしす夢魂恍惚の中しこしく  
夕<sup>に</sup>起され馬乘りより早しと云ふに如馬も起されやをら  
馬<sup>の</sup>踏り<sup>の</sup>根の雲を仰ぎの上の時午後時半なり

十九 第二回乃登嶽

村山より頂上まで九里半と云ふ草野亦立砂山各三里宛にて  
餘りの八所は胸突をて弛ゆる地なり實際は七里に返る  
之を4區に分ち今を称し其処には茶油用の官有り  
その間は道の難易にサリて長河と云ふ概ね十九町より十  
七町の間なり登嶽の洋知にハハヤも此処より路は殊に險  
峻を以て名所下るとも云ふ走り、固く電も途  
初めに登岳の縁由を述ぶに最長く書に兒やを推古天皇  
の御宇聖徳太子甲斐の里駒ヶ能り登りてを如くし  
次に文武天皇の御宇從前山次に於て勤行し近衛天皇



の久安年中に未代と云僧一富吉人と云山麩に經文を埋りて  
保平中に頼尊と云僧一富士行の如祖と云長崎の  
人南行真人東覚と云者後奈良天皇天正十年正月十五日を以  
て天下の紛亂限りて蒼生堵り安き事を漢し次上中  
渡海等の懐た事と種々異行を以て正保三年の月  
音百歳と長壽を信り人空の年中に歸出する富吉講徒  
に初り門流漸次増加し元禄貞保の頃に村上光清源  
伊藤倉行源と云派と云光清は江に人坂吉田の淺間神  
社を造りし倉行は又身禱と云伊勢の人貞保十年に  
十二歳にして此口七年鳥帽子殿に歸幽す二人共上江に在り

り南行の行法を嗣き布教に勉め後遂に富吉百講  
と云ふ如きの經盛を見たり此の末流の者は先達有り皆  
白衣を着け鐵錘を振り呪文を唱へて登山す近年に於て  
内外漫遊者の登臨して奇を揮者多く故に大に道末  
の隘路を致す白衣を着せしを淺視せらるること多し是亦  
馬子路の村山より登るに程なく草野に出づ東宮の原と云  
所昔日本武尊の嶽神を逢拜せし所と云二所は大鳥居の  
跡より余内通を耐を杖杖馬を駕り草野中に行  
便を通し病の愈癒に云々知り喜悅の情自ら林に難  
先の程は空念心と云ふに云は是書かりて見分が成り



此の峰の奇峭なる獄夫を雲六の仲の快と申ふに西三  
回又馬の上をすむ

二里にして木をかり此処に中宮の幡の山祠有り馬道といふ  
馬を下りて安山一里して毎垢離と云ふに吾日本武尊を祀る  
雲切の神社有り是より又一里にして浅河大神の山祠有り即ち  
一合目なり此表向にて家西三軒有り様と魁り一合目なり  
る前も本所所々に有り昔は爰に関門有り登獄の  
者を檢問し本宮の山手今よりを此持甚る者には山役銭  
を徴元和三年に月徳川代官井出志摩守文書に同里者  
防の所者土山を破り通り候は村山役人共津役銭を切後

錢苦なり是太官を相送と申す者とは是也此故に

明治維新前もは富高の東岸に村山三坊有り役所をこて大

宮には宗と登山するものを止めしこの小屋は此處まで

廣きこと數十尋なり猶ほ五時ヤシ過ぎたれ猶ほ程を

つむむと云ふに云ふ所をれば宜なる道にさる者から打ち止み

道も木と投す小屋四面は皆樅の老木にして其物の石は山

の半腹にして下界と離る故此處の候も涼ふみや、者が

に覺へた爐邊に踏す土酒など備へて夜帯を纏せしむ

起早く寐ねし山夢雫破れ二時頃には起すもて見物

陸月本の河を透り風帆にして林木を撼し山鬼事し通る











程なくさしる池を来り昔は池水浸として中にさしる魚を産  
せし今は雪解の水の流れ僅か濕るみ候に雷鳴の聲  
可も来り程を埋めさる如くさしる池の水内院に流る所  
に接り三鏡橋とて天の浮橋とて是より過きて登橋  
三島と名にして武相房総の諸國を望み大山江の嶋を明かに  
見下し作沼津佐野町とてそれを知れ伊豆の天城山尖  
島三原山とて望むべし

此より此は燈塔の側に内院の深處より仰り半歩を過  
まれば直ちに鞍馬の下に陥る歎知らず子知らずとて大風の折  
たゞはちと死せし人可も是より細峰に上り峰は富士

の最易峰にして次上の平地を抜ると四丈山骨全くと露れ  
石質堅硬劔刃を成る程なるを以て此の名なり峻絶  
斬るも手取じやとて此は又一の山にして前  
外縁遠く清國を見天氣晴朗雲氣なき時たゞは執  
州見浦河内琵琶湖を望むとて此日はむつかかりて三州の  
三宅島、駿州の原久能龍爪、薩埵なる遠州の今切秋葉  
たゞは指示せむ計せり

雷安河原をすぎ外濱道（内濱道は直ちに銀明水とてさしる）  
を仰り馬背山を登り雷鳴の山より危険なる大澤を  
見下し三方には内院を瞰見瀨尾を登り白山が嶽より



駿河龍爪申斐身延名傳。本語、**なほ**も見信濃の飯  
訪湖を遠く方に白く光り眼下に湖中の五湖に似れ本極精  
進川の西海を望む傍に割石有り馬を凡そ交路の上  
何所に裂き崩れあり一怪石の路を横み僅に人行を通すこ  
先下には常に氷柱有り少くは氷柱延びて山禪師大減  
の跡に其の下に茅子久留の穴あり人食行身録の行  
場は程遠からぬ処にあり其石像を置く  
是より金明水あり内渡外渡の二道此の合す水は実法  
く流がなること氷の如くいふ事早天も潤ふことなく又黒  
くし河年過るとも宿敷ることなく信濃は油壺様者下不

珍運て持ちかへる井徑僅に方二尺深き二尺寺まふ

之より七まがりの道をとり銚子の口より志ある見久須志か  
岳を登り祠を拜す鳥居御橋より山を下りぬる是より元の  
如きは去年過し故態を見事ここに剛力と別水入小  
乙公自ら心より右折し湖走の方を自ふ

湖走の方を自ふは最と名にして村のあり自らし其路程最  
も長き谷より谷の沙師をむの回らる沙に石の文を以  
て甲州吉田の如く様あり抑て一瞬に教有苑（寺）馳せり  
一合目より三合目踏はさむ（本）道由ぬ洲走りて時午後

三寸指り

羽里日記文平坦絶不見  
峻山峻嶽之状青翠見山  
其心似此文



是より龍坂峠から山道次第共市西三軒行、眺望頗  
る同然して此山中湖を下敷し西は富嶽の尖元として  
雲宵の峰に白衣の燈臺者、日蟻の如く懸ては、辨別すべ  
下は山中湖畔と云ふ湖周三里十所其形牛の臥しと云ふ  
以てとて半湖の名なり湖中一釣舟の浮ぶや、湖畔民家  
あり、数霞飛んで山を平ら海煙湖白に鋪き、唯や盧菽の  
風と云ふが、し海の舟のみ多陽一綫暮色遠より、三り糗  
糗を食すなり

の聲を聞き、大折すこと所相目も、しるま、一たる水、  
鐘が湖と云ふ音田の音は、し付吹る水は、かう、旅度、  
の暇あり、去年宿りし家と云ふ先方より、我を見知り、  
り、待遇懇篤と云ふ、心慰みぬ、前年、事など、思ひ  
出せたり、微笑して止みぬ

山中の湖は相模川の源にして、谷村に當りて田原と流とを道  
中州のうきを、陰概を知り、たる、しの、から、一見せば、やを、思ひぬ  
こ、同じ、し捷路を、はり、此、驛、かり、行が、必ず、して、標、  
に、出る、路、が、少く、なら、ば、よう、なり、と、ふを、聞き、如何は、せむ  
思ひ煩らふに、決し難く、遠に、眠るに、あらぬ



昨日は十九里餘を歩みし故に朝の暁に漸く  
起きて食をとりて交<sup>す</sup>生<sup>す</sup>田原<sup>に</sup>議は四里と聞きし  
行見<sup>る</sup>を氣をなしたつ事は再<sup>り</sup>遊<sup>ぶ</sup>節のなむ<sup>も</sup>たからめ<sup>り</sup>を  
自ら<sup>に</sup>針<sup>を</sup>の<sup>り</sup>是非<sup>を</sup>申<sup>す</sup>村<sup>に</sup>行<sup>き</sup>は<sup>し</sup>はぬ<sup>か</sup>ら<sup>し</sup>三<sup>段</sup>の<sup>路</sup>は<sup>河</sup>  
湖<sup>の</sup>邊<sup>に</sup>や、<sup>向</sup>過<sup>す</sup>ま<sup>が</sup>る<sup>水</sup>より<sup>先</sup>の<sup>路</sup>も<sup>三</sup>段<sup>に</sup>又<sup>行</sup>を  
は<sup>河</sup>と<sup>な</sup>し<sup>進</sup>ま<sup>る</sup>  
地圖を披き見れば西湖までとあり、<sup>其</sup>鳥<sup>居</sup>宿<sup>を</sup>欲<sup>し</sup>て<sup>甲</sup>  
府<sup>の</sup>方<sup>を</sup>起<sup>り</sup>て<sup>旅</sup>行<sup>し</sup>に<sup>來</sup>る<sup>よ</sup>ま<sup>し</sup>と<sup>思</sup>ふ<sup>に</sup>定<sup>め</sup>た<sup>切</sup>の<sup>宿</sup>の  
者<sup>に</sup>同<sup>じ</sup>に<sup>西</sup>湖<sup>を</sup>先<sup>に</sup>に<sup>見</sup>ぬ<sup>ら</sup>ぬ<sup>と</sup>先<sup>に</sup>行<sup>き</sup>見<sup>せ</sup>て<sup>宿</sup>  
を<sup>出</sup>る<sup>に</sup>此<sup>の</sup>舟<sup>を</sup>舟<sup>津</sup>表<sup>に</sup>二<sup>里</sup>の<sup>間</sup>は<sup>既</sup>路<sup>あり</sup>

十一、嶽地北嶽

十日午後九時去田を發し船津を自れり行く路に今老翁の  
逢ふ感に龍宮の奇蹟を説き身は剛力なれば御恩に  
さへ<sup>は</sup>ば<sup>合</sup>直<sup>と</sup>も<sup>て</sup>却<sup>案</sup>内<sup>致</sup>を<sup>む</sup>ま<sup>に</sup>心<sup>坐</sup>ら<sup>ぬ</sup>  
さし<sup>ば</sup>ら<sup>し</sup>か<sup>別</sup>れ<sup>水</sup>河<sup>り</sup>湖<sup>に</sup>出<sup>る</sup>夜<sup>雨</sup>跡<sup>ま</sup>に<sup>清</sup>れ<sup>す</sup>雲  
氣<sup>四</sup>山<sup>を</sup>籠<sup>め</sup>た<sup>美</sup>空<sup>を</sup>半<sup>腹</sup>以上<sup>を</sup>埋<sup>め</sup>一<sup>盞</sup>の<sup>碧</sup>水<sup>正</sup>に  
漲<sup>り</sup>秋<sup>水</sup>四<sup>維</sup>維<sup>の</sup>如<sup>く</sup>流<sup>る</sup>平<sup>湖</sup>波<sup>は</sup>海<sup>の</sup>敷<sup>の</sup>白<sup>鷺</sup>  
飛<sup>び</sup>起<sup>り</sup>て<sup>雲</sup>蘆<sup>荻</sup>十<sup>方</sup>漁<sup>翁</sup>一<sup>竿</sup>を<sup>延</sup>ば<sup>し</sup>て<sup>岩</sup>磯<sup>に</sup>坐<sup>す</sup>  
宛<sup>として</sup>南<sup>宮</sup>畫<sup>圖</sup>中<sup>の</sup>景<sup>致</sup>なり  
是より西湖までには廻送文錯し路を誤し三回三回に



此山は漸く湖畔に去るに数軒の屋あり此山は  
を同様に明なる大田却せし折から西より田舎人來りては  
剛力を引直して能く粘進本極を見人穴に  
此主余と謂ふ本極を行き及を越へて此には  
此山は漸く湖畔に去るに数軒の屋あり此山は  
を同様に明なる大田却せし折から西より田舎人來りては  
剛力を引直して能く粘進本極を見人穴に  
此主余と謂ふ本極を行き及を越へて此には

湖は周三里半北に十二を嶽行西に雪塔岳行東に  
山岳あり南は北野に連る富岳は田舎りて明なる

情しきとし湖中に澤草多く刈りて田畠肥料とす  
山岳西の樹林數十所の地は前年野火の燒く所なり今  
は黒いしと枯木の木忽ちして輕舟葉波を載り相  
中ひ揖して見れば女子數人を載せりこは雲村の田  
舎對岸なりと云ふ水邊に舟を繋ぎて地に桑摘み行  
し舟に乘りて舟將に舟に着かむするに舟子忽ち呼  
び聲にほりて法地筆の理窟の像を以て目に定めて  
見ると水が波かふ明には見難し昔し十二嶽に鬼の  
人達しは空海此と筆を壁上に投じて理窟の  
像を畫す之を鎮しとて十二嶽はに鬼嶽を稱す昔



從小角山而下登る前に法を修めたる雪平地なりといふ彼  
の田舎人は余は耳詰しかが大聲あけて舟を早くせり旅  
し見せしめたるは其方便にて何んしてんふ果して然らざるや  
此處崖樹里く水中の影をふりし點冥洞らんれ微に  
氣の浮ぶを見り

舟を去る上る路は樹林中にけり巖石を以て路にきり  
行末較艱なり嶽の北麓一帶の地樹木甚多鬱として畫  
暗く所謂處女林の *Virgin forest* の真相を見る然れども山  
はたゞ毒蛇のふしを以て法師の呪して禁せし故なりと  
剛力得ざるを以て物語す

行くと三里散官より時々の山官の出現せる遺蹟なり  
巨巖と錯して洞窟の中に辨天の小鏡なり此處樹林  
深く深く先回皆濕り苔蘚厚く鋪き一線の日光此  
上を空冷風森として洞中より吹き起り心骨を寒く  
肌を粟を生する計りあり別に面白きところにはならず其  
さまの奇境にして其境の妙遠なる天下未だ其比を見ず  
徑遠からの所に氷穴は四時氷を結ぶ陰寒晦昧天  
の鏡を知らず  
是より數町して精進湖と云々湖周二里半東邊には鞍  
岩なり云ふ奇雄なり群山四面を圍繞し湖而波立す



山鳥を鳥と水の中を影を鑑して飛ぶ出稚の極守に  
遠眺すること良久ししきは西湖を眺むが如く貞觀の寧ろ  
中絶するなり大寒の候にまれば氷結し人は其上を降り得  
ると云ふ近日常所によれば此湖山角地某外人の既有家婦  
し洋風の別墅を建つよし真が偽か未だ詳細を知らざるも実  
に幸なり江の島泊摩の如くかして風致を分て招害せ  
し子非らずや當局の奴等何れ其體なるの甚しき  
又千里許にても柳湖の如く湖周三里其水散玉の如  
し北に城山鳥帽岳を頂ひ南に金山鼓岳割石岡  
城の山を望み最し幽深なり折し室やかましく夕陽薄

なり異形の雲空に昏へ風水白を拂ひ浪花起る何  
とはたくに繪巻に見し彼の瑞西地方の風致何れか甚し  
止むなきの奇なる聯想を若く吟望するに多し  
還りて市振村端の茅店を健ひ彼二里と云ふ剛方左敷を  
を抵安老所跡に精進の村あり路は湖畔小山の側に  
あり何れぬけしきを眺めつ行くこと里半ほど精進村あり一  
軒の茅店を抜し一軒を何れす此知るとは故帳など用ひぬり  
十首朝来雨後顔を越え後を見れば脚下精進の湖  
煙りて黒く小雨益劇しく衣袂皆濡る山鳥の宿少飲みたる  
時路を深くと二里許に換し漸く路を末のこ宿を越へ雨半



峡中より富次山を渡り午は討甲討子より遠威を佐  
藤某を討ひ其家より富するを二日

再興 仙峡を遊び金峰山頂を眺め又駒嶽八ヶ岳を登  
らむと雨清るを待ちし中々青くも景色は若く  
柳はしこは前身遊びし地なる人に別に見るも個所  
はく二日位は偃臥し以て連日の疲勞を醫す家人勸待  
備せしよりおむと其家より歸りしと思はれり  
忽ちして老報有り日十日富次山頂に暮る風雨十數人  
行方知らずは死せしむべしと嗚呼余遂に是を返すは  
たし乃ち酒を地へ灑ぎ山靈を招き謝するの教回

けりまのり改則してのり  
りまのり改則してのり  
りまのり改則してのり

十七、登嶽者の二種級

日本は山嶽國なり故に此國に生産する民人は事皆其の雄魁  
にして具出圖せし形定を觀目し又た風雨晦明四時の奇事更萬  
千の氣象を觀察し自ら山嶽を以て神靈の宮窟となす威  
徳を遠養するに至る要するに自然神崇に萌生し高山絶  
巖には必ず神若くは神を祀り山伏巡礼者登りし拜禮する  
の風を生じり今日とてこの新世界に於ては多少旧日の如き想  
念の信仰を打破し巡礼行脚の絶へしは其の國を擧げ  
て美術的觀念に富み山野の風光を絶愛するに伴ひて  
其の四角の遺蹟に於て自然の絶美を採らむとするが故あり



是吾國民特有之種美風にして自然之美を抱愛するの極  
凡常瀟灑快暢都に於ては幻境帯に眼前より極感  
挑撥を求むることを渾然融和して雅な愉樂し得るなり  
現時の富貴者の中に於て分明に二種級を區別す他は概  
大抵然らずし特に此著明なる一は昔時の遺風たる之信  
迷想的信仰者として今時に起りたる平民的漫遊旅行  
者之群なり

之信迷想的者は此如くし寧ろ御嶽などには於て著名な  
ち多きが余が觀察家は此處に限るを以て他は論及せず即ち  
角行真人の流派を汲みたる一種の宗教を信仰せる者として

行を以て美事とし白衣を着し高履を穿ち鐵錐を  
振ひ咒文を唱ふ彼等の多くは中土内者をも律儀す路を擇  
ばずして登攀し或は常に高履はきくまには草鞋を  
穿つことしばしば期を定めし年一回或は數年中一回必ず其の序  
に他の名山を詣づるなり  
余が見たるは十有餘地老翁にして髪が登攀すること既に  
十餘回余をば生の思ひ出に好し嶽頂を窮めしり行け  
得るわけ登り見むもの意氣込みなり且信とは以て伏波將  
軍も若らぬ勇氣の程いと頼母しく實に日本の民人なりと  
ひそかに感じたり



次に見しは十余の老翁あり一人の剛力を伴ひて上りぬ胸  
突所の絶崖に来りて流不<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>因<sub>レ</sub>に一步も進み得ざる<sub>レ</sub>其  
杖<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>立<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>域<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>臨<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub>轉<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>剛<sub>レ</sub>力<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>大  
にして長き<sub>レ</sub>杖<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>老翁<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>帶<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>中央<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>結<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>ば<sub>レ</sub>  
數<sub>レ</sub>町の<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>處<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>け<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>曳<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>老翁<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>杖<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>力<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>辛<sub>レ</sub>くも  
登<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>老翁<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>涙<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>女<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>ば<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>老<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>知  
ら<sub>レ</sub>ざ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>ず<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>登<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>今<sub>レ</sub>日<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>好<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub>實<sub>レ</sub>に  
よ<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>御<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>更<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>男<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>鼓<sub>レ</sub>舞<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>視  
不<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>ず<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>氣<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>起<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>次<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>周<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>より<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>婦<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>此  
は<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>考<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>ぬ

劍峰の半腹に下河より余はに十余の婦人の物遣して  
見<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>既<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>七日<sub>レ</sub>回<sub>レ</sub>絶<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>こ<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>書<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>か  
ら<sub>レ</sub>な<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>ら<sub>レ</sub>ば<sub>レ</sub>劍峰<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>絶<sub>レ</sub>崖<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>新<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>踏<sub>レ</sub>銀  
河<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>瀉<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>滿<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>風<sub>レ</sub>露<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>髪<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>洗<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>高<sub>レ</sub>寒<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>胸<sub>レ</sub>に  
天<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>聲<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>唱<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>星<sub>レ</sub>斗<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>禮<sub>レ</sub>拜<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>  
其<sub>レ</sub>貌<sub>レ</sub>既<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>癯<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>顔<sub>レ</sub>色<sub>レ</sub>淡<sub>レ</sub>黄<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>杖<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>引<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>惜<sub>レ</sub>壽<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>短  
く<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>又<sub>レ</sub>悲<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>べし  
余<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>龍<sub>レ</sub>宮<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>ん<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>彼<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>野<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>田<sub>レ</sub>舎<sub>レ</sub>人  
も<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>種<sub>レ</sub>類<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>山<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>湖<sub>レ</sub>精<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>木<sub>レ</sub>樺<sub>レ</sub>諸<sub>レ</sub>湖<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>衣<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>解<sub>レ</sub>す



湖中の水と混し水中に立ち合掌して何やら唱へる長衣の  
人々

余が實見しとる者は略ぼおのれ蘇州獄中泊る者たゞ  
は更に甚しき難行をたし其脱に烈日に焼ける衣角  
を踏み登るは細の細なる者たるよしすべし彼等は唯だ神佛  
を七信し遊する者にして其極途に心の勇氣を震ひ身  
體迄犠牲に供し老行をたすものにして自然の美を觀する  
るなほは心に才義と下流しと彼等中には十回行美  
十回の登岳を遂げきり少しなれば道清庵に隨附する  
旗は彼の名を仰して懸けり古風の先達中にして

その二つを見る

次は平民的漫遊者にして年若き者居多し彼等は同じく白  
衣を着け時に呪文を唱ふと雖も唯表面的なものである彼等は  
満中にして多人教一齊に來ふが故に先達に對して假に如く  
之を唱ふるも青箱田圃に風草浪を翻し天に時雨降  
秋成期して待てよと見ふ彼等は自ら飲ひ出て家令之許  
し満中の同志と共に行程す彼等の此行は實に一世の出来  
事にして自傳記に記す場合には特筆大書すべしなること  
疑を定ぬれば何れは多少の經驗を得て爰に數井蛙の小  
見を脱却するは是も幸福有望なる如き機會なればなり







馬場

江の島の岩屋を何のたて銭過分に合算されれば徴収す論  
詐漁郎の難辨所謂に白銅二三枚やりと半分回水よらぐ  
り地目二三報酬として受け得る知らぬ者こそ佛なれば  
等貝狸のたねに見えんとおた勸められて二三銭の貝の叙  
十数本を購ひ甘言中の人に贈り以て歡心得むとす罪  
意戯れ中こいおしかなべし  
彼等は色遣とせりて歸り多々の観祭と經驗とは実彼  
の人をして幾許か上らむるたふし彼等はかして中民的行樂  
をなしたげざる社会的生計中靈時の田暇を樂むを得り

六、峡

たまたまの甲斐の國は四面に中し掘鉢の底のよき高年の平  
地なりん中央は甲府にして田次を無う二川此を昔流すよ水は  
田畠少く米穀いし自國の用も足ぬれば大方東の京のあり  
輕きこと見えり旅客の此如き事とわ不平はは草鞋の  
馬子ことなりこれいよもほ皆他國を來るものにして二義二義の  
もの理しかなれ

農業は此の充んたつては海も國故魚とど勘なく  
文明の利害も天際をば左何とす由なく峡中の運輸はな  
然とよは魚價の高きこと運城と常なるは多きは駿河より



来る或は東馬などして三阪を越て来り或は人が持ちて此  
り来り甚しきは富士の上り舟を来り故に魚類に三種  
有り自ら新潟河等なり七或るは舟を来り同程の切身を  
賣るは他故に非ざれば特らしては古き故なり河魚  
甚なく鱧の如きも此類にまがし  
人間をの要する食物は斯の如く又半に似ず水佳良なる  
到るは河水を飲む或は田の水を用や甲府などには飲料  
水を買を用や物産といふは水晶甲斐絹蒲草などにして日  
用の要に何らねば直ちに一般の用を充てし難し  
甲州人は自尊の風を富め高く標置して池に下るを有し

其の甚き様を見たり拙なく萬事固然の至義なり  
甲斐絹の輸出に横濱商會より掌櫃せられ其他新中  
業を起すたりも皆他邦の牛を藉りて之を興し國中  
一般信を尊ぶ事とて大方なれば分官をつけし年ばかり  
年々盛りにし事とて又執拗の所し行衣履の欲  
之らりと自然と甚しき方々飲み犯罪の多き人なり比して  
日本やと稱す  
余は西回峡よりと風色の妙絶なるを愛し其自意措く  
能はれ然れども余は他日何らなる運命に遭遇すも此  
土に水佳するを好まざるなり蓋し里仁を美とせず君子其



何を擇ばざるかぞと也

月二十日星天なる音を決して幸して夜す見んと欲  
せしは雨遊を期し直ちに信州より三里北悲崎より  
何なる教音ありと云ふ名屋に奇巧を施し竹は  
待た見る來るか風流使者記に詳述せし此處のこと  
たり此より北の西迄河川道は産無渡り其左岸に  
河此川折と暴溢して流るる計はぬ様なる故に新  
道河此路連日雨なる後り得る由河川能く回  
り導くこと後述しと旧路を更  
悲崎を去れば七里先河新産産壁連ること八里許

新村と城の此邊なり山先は奇峭と見ふ此の句は  
紅葉黄葉連七里散又、鸞鳳高翔七里出散と胸中  
に記隱して有りけしが斯くはさる眺めをよやなし遂に走  
り半途凡七里名句を得て去る雨益甚素回向の山嶽  
雲霧の中此の眺望なく雨は凡益甚辛艱なるべか  
らば杖履を雨に子規の啼息を聞く旅情は更  
に之を思點然と

申七櫻も行きそ見り駒車も登るるやうなく圓野を原  
敷まを經信州の地より馬木驛より宿十連宿雨  
歌もは橋高聲中情坐し残燈を對して悲吟する者



良久

月王日朝夜雨猶ほ晴れぬ瀬澤と糸送ふれ新田  
柳澤を過く途上逢ふに隈光姫とて雲雨の中は  
く者たる即ち諏訪湖の事なり四里六山より遠藤伊  
藤某を討つ其家より皆池上迄元々某製糸場は  
ふね彼れ又酒を載せて東訪し同話事有る且其二三  
里又雨降るれば淹留す主人松堂文話一部を出して酒  
閑具とす二十日雨歇みければ4宿して夜三里にして諏  
訪の所に出づ後の方を飲めれば心嶽の山嶺猶ほ雲の中  
にあり

十九 我撫湖

諏訪湖は昔天賣大にたりは教多地文學者の稱す所  
にして湖中より湧出する温泉は最も有力なる證に在るべし湖は  
我撫湖を稱し固四里二十余所古は或は猶舊湖と稱し神  
代昔武甕槌年、健甕多方年と追ひて雲を以ては、此處  
まゝ来りて是に追感三層服せしより建御名方は、諏訪大明  
神と崇めたまはる者なり湖邊風光の美たること決して若  
にこのた

高島と城址は湖の東南岸に在りて湖中に実出する小洲  
たり今公園と名づけられり三島中洲の神文所なり



園廣袤數町有樹竹可翳有亭榭可臨東連  
市街西臨湖湖圍大約四里南涯松杉芬鬱同微  
露華表者為大神本祠與此岸別祠及西濱古悲  
園隔水相望彩殿彫欄歷歷可指而沙禽風播  
出沒上下尤有畫致其外則奇嶂雄嶺綿亘環合  
而巍然常大擁護本祠者為守屋山青琴曰此出  
形有曰詭訪富士其東直臨直臨立如劍或刺天者為  
甲斐六ヶ嶽富嶽嶺其間白雪玲瓏倒浸斐波秀  
影可掬富別祠隱然隆起起伏相倚西者為和由  
塩尻諸嶺嶺漸卑延望老渾松嶽縹緲如雲此園之概也

久家の大平院既以此妙祥日後何心更に贅語を附以  
て湖山の香雲を汚るは上下の詭訪神社に上居  
社殿頗る壯麗下は結構稍劣と雖も古雅にして高  
潔自ら神威の儼々たるを表すに足る

羽里曰自正詭訪至有賀  
道岐路四出不知可擇孰或  
行屋舎之間或何日睡之間  
忽為河所阻忽遇絕壁後  
游之士宜慎乎

湖畔の某坊に温泉と浴し衣物の汚穢を食ひ  
て夜し湖邊の一周を思ひて深き道を失ひ田河より西望  
すれば山嶽の壯絶する所ありて天散峽のたゞしと田  
睦の中<sup>を</sup>遊り其方格こゝりに連日の雨より満渠盡く溢  
れ衣を塞ぎて渡ること数回は隙を這すること何處も  
園をり出づ

吾昔行幸不徒誇其景  
可想若潮流教會得一路  
也



湖に墨家風を粧すは製紙場の煙突にして  
其数数十本とあり樹下に黒煙を吐く宛実と奇異の鬼  
やうに鴉湖社談話館とい其最まうらひして正三  
百を便所し田中の園は論ふと年々毛野々地方より買  
来り精製するものが水より故糸線竹極く佳良  
横濱市場にて是鳥價を博すと云ふ  
天龍川打ち後り猶ほ湖岸に傍を往に途に十丘有り  
不澄秋景し前に小葦表取乃登臨して眺むるに  
鴉湖の全景双眸の中に入り明香殊に愛ぶし何と  
心地なや同様の道ほしむと懐かし

羽黒田舎橋上月景  
湖月景之最優者

此より少時の程は湖岸を歩きたり離るるより  
鴉湖の景の美は一局部を限らずして全体を見渡すに  
墨家も以て事なる部を収りて園より不可に  
廣闊の趣はがほほしつ留を望むは奇觀とすは  
此の由のみ計りしにさく思ふに是れは其地  
の夜月夕又一しは眺むるに  
ふんきは山嵐山村の路に秋葉神社所を大祭  
たりとを賑は行かふ人々夜香の影あふれ  
しを限らば紙を諸裡の道り或はか藤清正度  
殺すとい仁田計の人穴ある必なり大士掛の道り



河山車馬比して費用も少くあがぐ又珍らしき物なり  
かして鶴湖四圍の水も概ほ周し終り神宮寺を以て  
至り諏訪神社の本社を詣り世に「宮」とふはこれ事な  
り杉老木直樹にして千歳の緑葉は晝尚暗黒中種  
瑞籬の中は淨らに塵をそぐべし社殿のまはは花や松  
深草なる方よりは何ぞ且に冷く年長りにふも見せしむ  
宍杜は其處かゞと休しくとらふと神宮寺を以て  
尊事にと相り多きげに大軍神の祠なりと覚えおま  
あやぐと鶴の二つ三つ時求めて揃へてはけやくと水村  
を知らしめり

廿故園の風色

今宵は此里に泊らばやと宮を出て社前の旅店に宿ま  
れははやに家にたどりしき病煩ふ人何れはそすげやくのみぬ  
この外も尚ほ其軒の影も惜思はしからば狹し心は謀るや  
今より行きて相道も同じ御堂階のまはは月影の都をよ  
るべしと急ぎてこゝを立ち去りやがて杖突出にたが  
時は高がねの路をゆく坂はしむれも山嶺の眺め殊の外よ  
く折しも白雲ちや宮や日雲に見返す限り四圍の山こゝ嶽塩  
尻和太明の時たゞ傳言かり色も鮮ならん鶴湖一面の  
水は夕櫻と掩けて宛ら鏡の星うらむが如しとれは下











これより本堂の後なる位牌堂は道づきの寺とせしは七賢  
莊嚴瑞瑤金銀の雕飾をなし花かたにさしあやかりし由なる  
が湯也或亂は背そし難く風をさされ雨を打れおろか  
荒れ果てし秋の庭壹敗の壁はこぼれこぼれ巖穴を過し  
天井の垣は室の色を窺ひ得るまをさしなりとせし直し  
堀の任持の僧ははらけ夏春飼ふも本堂の中ははらけ  
桑の葉を散らししより夏目し心せをまじなりかゝるほどよみ  
はせ歎ふははらけかては佛に先ず凡俗の程見歎  
きし心せし尤も国益をいひて得ること人の子世は極也  
宜しむとせしなり

寺を去り城址より路下から藩士の旧宅の跡あり楚のみあり  
皆柔畑となり了んぬ城址より荒れ果てた海はこぼれ夏  
草の茂みに埋れ武庫馬場城樓地有り心なほ今も影  
をいひて牙城の中は今の園となりこぼれ残りそのはらけの  
木はむかし太守の奥庭に眺め添へ春は花秋は紅葉時  
のふや折るは宴遊の興を起し詩歌管弦の催となりて愛  
ひらけしものなほ今も今も今も今も今も今も今も今も今も  
然れはかし心せしなり日影流るをぬまなりこぼれ  
七八の遠愛と思ふ近寄りて昔を語らむとすれば非情の草木  
物言はぬば詮なし甘菜の詩ふこと今も微吟十は指を拵ふ



松風の玉琴の音は心通して相和する如き哀れなまきし

此の松風の音は心通して相和する如き哀れなまきし  
此の松風の音は心通して相和する如き哀れなまきし

城址西端の崖上より望むは四方の眺望をひろく城下と軒を垂る人  
家と敷居と煙をたたく遠山と村々と雪の白むる城邊老  
樹疎ましく白聖粉牆見難き程なりし今は此の代りありと云  
ふ事おしは未だ雨ふらむに何の虹か眺めはむ高き天女橋  
も今は是れ老ひてちへる宮を倒しにしと云ふはつかりし事と流川  
に打ち流ぬ見とじ見とる其むあしを聞はば一として新防の媒ならぬ  
はなし

東の方には月藏山の山つちをたてて如き森林の中に社らしき物何れ

は何をたてたに因れば仁科太郎信盛の下の人とも分ちて答へたりと  
答ふ天正十年のむかし織田氏の軍勢四境より攻入り諸城皆之に  
おぼむに此城のみは信玄自ら築まし故要害堅固にして容易に  
下らば心子信忠三方餘騎に恃として専ら此一城に當り幾重に  
圍み稲麻竹等や如き鳥居を築きたるは逃れ難しといへにける  
かそ面白は信を遣して降を勧むに去計信盛心鐵石の如く更  
に信に討つ果は自ら切らぬといふ城に信忠大に怒り元丸一  
軍として路を束の後の山つち登り鳥鏡を放ちてれば腹背  
敵を奪ひ少許も支へば何れに非運と臨みぬ此時は初は後  
を指してははかふなむこといふぬかそ守城勇士奮闘し中



信盛年かかれし英 國の英雄まじし血戦しが刀折れ矢盡き二層を度憂ふま  
勇じてまゝ愛せし境 首自刃して先世に生得信盛生年十九歳遠恨やる言  
中より実時後部集夫 大樹の下に坐して腹を切り腸を掴み樹皮に投げ付け死せ  
て本神坂の宇敷の浦に 其剛徳の程は元勝軟なしの比ありはた最後の勇ま  
しが全短冊馬印をま 武者振はりに違 鳥江の項切まきとるも流しに深く百歳の下人をし  
古時戦終りし後村の首 長堅の冠を衝く感はらむ  
姓守討死し武者在 山後に寺に居て此戦の時田勢推りて兵糧の支度せと金せ  
きい分はたかなん 此寺の法師西田家の恩を預り身なればを固く誓ひし忍に  
りり是れ其跡か 追ひ掛れば池の寺まは痛く恐れし家まに命を惜し  
しは信盛の祠のあり 濟を在陣太鼓一つ感徳のしほて賜けり今猶は持ち傳や  
るは今立郎山とて

かて持死仙れて被下り死

素永安政の黒船下

公の語らぬ

甲子年各藩武備 公園の本には山祠あり藩祖奉り奉納せし額も平に戊辰  
を感し折れ藩ま 子哉はの軍にやたし藩士の行を爲しはけりを平にはわが伯  
の寺を集めし人骨 骨をばせし心けりて見えん感深し  
戦死者の骨をばせ せんをきりて後をたす西の山を雲かりる今にも雨ふらむけし  
有依つもの仁神を 提可なる桂の寺に故なるに一物を名を思ひ起しけし母も思ひし信濃太郎と名つ  
ゆしをふはばま 怪害の物語を語り聞かれし  
いふ藩傳中村某なる 彌はたてし建議して 是より遊を教られきまを親戚を訪ふに  
別郎中に討死す 祠を建て信盛の者留守の者氣を毒に込り又には池の炊飯の事尋ねしに  
も奉り毎年三月二 乙地には死に絶しし母や我々のことをまじは

家を悔し

かた



力士相事りて技を奉  
ぬし無情奉行奈  
事一行ふとて定  
るも若家もた

十餘年前事りて其は年々西國の消息は彼我の有様定

未だ推すも今は今までの所より東を見れば常道にて致すべ

くはる事のみならずは忽ち望を失ひて故いと思ふは

きず痛はひとの國事りて想のみしとてはなす非おんぞ辭し

出で所のさま見物又前の家かゝる雨はすしやと

吾祖なるは西田流の輪廻とて藩録を食む故子とて

冷ねん人なれども故に白紙にて逢ひし人の家計はまじり

たは我れもすすめしにに控せし淋在ししはは必ず訪

けんをたひ言はせしむし

下は藍相 雜事の御

御聖を承りて

を傳向申し

おぼしきもの

靈泉

夜にたれば湯にゆく坂をにけり境湯の信の傷を癒し

湯とせは長くとれぬしこの頃又見せしなれぬれ御

ふる人はあがれぬとて約は終らこのたぬ家泊り次の朝辭

して去つげやこの地には訪ふも程のふし何れはこふす五の御

里は松本の方赴く 再三郎の田を思ひ

美なるが此の里山に水けり推すと釣志し身は我れ兼

様の地なれば吾も程も昔は黒御なれや湯澤の白の家を

擧げて再びは歸休し誰やがさしやきふ所は庵を方

一町を限し園池をせし昔年には花紅葉とてせきま植す

又四季の眺の南山の景色も春はなほ山はりに心禁し余

余は天子の御相とわかれぬ御先をいかにこの榮たらしむ

かの形山かいひ  
いもわく三十七  
してゆめをまき  
るすにせしやん  
はるすは  
必ずす

冠の冠  
すや中へんににん

すや中へんににん

すや中へんににん

すや中へんににん

すや中へんににん

すや中へんににん

すや中へんににん







ければ唯一途にして直ちに去る

ふより直ちに三才山峠なり。こは人行すも必なる上に曾て  
洪水の爲に道路処々崩壊せしむ。直して流石破確とて水鼓  
走し衣を寒氣に及び鞋を破り踏む羊鞭を以て流石加ふる秋  
陽程とせして夫熱燬なる如く地を以て行くと重鹿教湯に如  
す。こは温泉有り溪邊の風色は遠義に似る所有り

二十日朝米飯少時にして歇止。終日曇正午田中より以て同西側  
の峰巒皆不骨を露はし秀削挺較觀ふ事あり。小諸小沼を  
經つて遠くより頭之茅師團野戰砲兵射撃演習の爲に事々大  
雜沓せし故に止むなく驛端の小宿に宿す

### 其、淺間山

淺間山は以て山を以て本邦有名な法大山にして富士山並に伊弉  
留を以てして千二百尺有り。信陽の地全<sup>陸</sup>界の脊より地盤高  
故その山頂も見れば登臨すも容易なり。此在之郡の北境に  
阿上信西國の州界を跨る頂上大なり。絶へず白烟を噴出し  
其勢すくなく猛烈甚大なり。其の標高は何年  
に起りたまは詳かたからず。曰く書記天武天皇白鳳十四  
年三月信濃國に依降ると傳ふ。記録の如く或は其以前  
より貴大せしむべし。烟は今白く以てし。繁華す古歌に  
多く之をこゝの破の在中傳ふ



信濃を淺河の岳より遠近人の見やほはかぬ  
と詠し伊勢物語に載せし富子と並ひ稱し我邦の三山と  
なり而して對し大音大江山相傳法村其害を被る事多  
に沙石を雨に泥はを流し大坑も亦厚寢形す  
登りて二徑あり一は階掛と此行し小淺河山の樹蔭より  
西の山より正退今より真直に上り河内三里餘遠き  
余は此山驛より明く是非を察せし法し初め者  
余の案内者を求るまじむ生憎當時陸軍演習のため  
驛中大に混雜し平生のいま人皆驅り生をた住けられた  
坂平の僕人をもとる者も居りしと云ふは如何程

あしとらふははあまにやと問はば平時に二十里位なきが今は其  
二倍程なること云ふははたは是非に比較むに年々  
久しき朝暁天を乘りしは約して歸す  
二十九日早曉此日の大を氣又候はし多きまて支反せし  
案内者の事を心に念事路に輕装して登り真の道は驛  
の東端華表の傍より上りて射撃大演習の爲  
の通行止めを以て西端に出で道路を切り出さし  
時に奇吹なりとは一面の原野にして當年生ひ残り  
秋の近きは枯板塊菊など咲き白の地上に錦を朝  
日の光をまき浦の白雲、珠をまきとして風をくけ



るさ上美はしと美はしが昔昔の回を行く凡二里程た  
る亦上道なるには赤松挺な生ひ残り重なり今を  
日影油ぎぬ程なりたその木の幹には丈高が示して精屈す  
るは又付山次より吹き下す風の烈しき故や何れ山処に  
水流水なり

行くに里赤滝と云はれつくに二層中にも不動の像は土  
苔や苔の上には彫りたる石の外に石を造りて立ちまはり者  
狩者かゝる焼火する者皆くみりて向貌黒色なり  
又一は怪黒山鳥のさよを呼へり滝はれり少し上は  
りこより十町上なる南樹の血の池より海下してハ瀑布なり

瀉下するもの甚高き二丈許りは水は赤褐色にして鐵分  
を多く別と見ふる程の者なり此の溪河は樹木疎に深  
く白きを透徹す涼骨に透るを覺ゆ

更に行きて血池の邊に至れば亦山に絶へ登るに陸の山路  
崎嶇にして常一層峻険を増し句配多にして屐を滑ら  
ず行ぬる艱火石焦土途をぼし巨岩怪石散在し一見す  
ると高き全目より年々や大なる噴火なり砂吹き下  
す故堅まぬおろし草鞋の底忽ち踏み抜く仲も  
見れば石尊山と云が巨岩に其上に前掛山と云す大の  
新岩より成る薪地と云嶺峰は其のやしく右の方は火の



青烟直中 天を衝き見たり可くなく物邊を心地せぬ  
左には朝の山並みなりとは次なる早けり青くや底の様  
り事里許けて路は書きやみよに志を踏み沙に埋む  
足溜らしと運ひ頂上見たりと上り河つこと甚しく山止  
やま水たれは濁を療むすまなく折は健ひつふ力  
を鼓しに管より

右側には新産り長は敷所なりとわびしく高きは三四丈程  
河つこと前境せしと見えり之を佛志といふ荒涼の有様快  
しと自ら感ましぬ太古共王氏頭を石圓山の觸り天柱摧  
地維絶ししかるを奥のたしや

此の案内者は早急老翁なるが差す時より狩夫せし世を  
過し事り殊は此邊の地理と詳しければ成るべく捷路を擇  
び行く彼が連水も一足り大い合はた老し見えぬと  
前掛山より下りて七町火口に至る此処は実り絶頂に  
や、平坦なるがこに虎窟宮藏の十合龍河 幾年の昔建て  
たりけむ物古より大方は破壊し神體もなくなりけむ  
西三米よりなるみ道ふより此処まで三里十半町なり  
青大の谷に掛をいひ直径三百米実周凡そ一里里東の  
方へ傾きより故に青大谷は砂石を雨守り上州の方より  
こころと勝る煙りも市に東むきより 形は涌きの如して深



き固より測るべからぬ業の者曰く往年西三の洋客を導きて  
来り長きほり金に鐘を下げ大の中にも垂れしも皆中程  
より焼けたれ深きを 知ること能はざしと云は勿論のことな  
るし大子近づくに随ひ地下の響雷の如く坤軸揺蕩する如  
く覚へ白烟黒烟天を蔽して<sup>湯</sup>逆巻きつ<sup>あま</sup>なり熱氣四射し  
汗皆に流る煙の音は氷蒸と氣がまはして地に亜硫酸<sup>酸</sup>硫<sup>酸</sup>水  
素<sup>酸</sup>の瓦斯を吐く帯には白き烟のみならず時々黒きものも  
紫の者もと云ふ世には火にけり火を噴き石灰や新なご煙と  
同じく様子覺ゆる者何れぞそは火なる誤謬なり偶々煙  
の流黒に交するは地中に熱の爲に焼ける粉はをいふ

故に云し現大の西北に二里のそ状岩壁あり遠きは牙山といひ  
最高大は前掛山より火の環壁の残留する者なり此日は噴  
煙殊に成層せしむ特達して全き烟を吐ぬことなり かつ時に  
火の壁を一周せしむ

此日天氣快晴なり故山上眺め又妙なり 西北の方には妙高  
之は隱白根の山なり此は赤城棲ふより刻まで妙義碓氷  
は脚下に河原には信濃の境界の御嶽槍嶽より駒ヶ岳と云  
り南よりと甲斐又全国の山嶽有り富士はほんとして其向  
に孤峰すも認め違ふ方は太平洋の萬里煙波を海  
に



此より進めば時頃いして今は十時過ぎしが山高にして雷運は過  
る故日し進み様い覺へ赫と光面を射たる熱氣体を蒸らし  
暑熱耐へ流し捕の水を思ふも切なり幸白者取らざるに雲  
より西方朝の岳の東腹よりくく水けり多きを飲せし  
時はみ抵飯を食ひ切て下りて此の旅館より時正に二時  
なり、往還僅し七時を過せり

こゝにて輩の者を謝して還し宿をきて、車井驛より時停  
車場前の旅店に投ず此地者は寒村なりしも今は内外  
人遊者の地となり繁華實に改り計りたり、外国人など  
都堂にけり生硬なる日本語を吐す却て駄舌の如くいふものし

廿二 妙儀山

平旦時夜の嵐車に駕し難氷を越横山まで七里の間は日本  
鐵道中亦可難處にして傾斜十五分の割合を以て山嶺の方面は  
より、故に鐵道の設計機關車の構造亦通常の者と異し既  
謂ふ如くシテ採用せり大體は普通軌條の中央と軌末との  
之くなることを設計機關車、内部に亦別に並進輪車を取り付  
此の並進車は之くの並進を交つて昇降するに掛たり七里の間隆  
道の多きを以て二十個其最も長きは千二百尺にして緩急を合  
算すれば強んと三哩に近く一陸道を過れば又一陸道を過  
半ば地下を走るの想有り昇り同速力進んで流石の嵐車也



古歌  
うまひをたぐらげしはたふ  
あはれむこゝれ三回も

随分困苦するも、一回も出た所へ、  
氷は往時留又は笛吹と書、日本武尊東征凱旋の時此の  
山頂に登り東望し橘姫を追慕し嗚呼去孀亡と書、  
れを記して其他四蹟を富む其國道は羊腸馬脊の隘河  
り懸崖直下深谷を臨み又して競々しむる所は河津は車  
中より見よ山空の奇峭溪勢の峻拔氷水清華信別  
境山寒の如し唯が一睡の間に往き過し行路難を留め  
たりは空合風光を何ぞ得ん是れも事心なし山は古來  
危松の紅葉を以て著る待て西三年、杖杖彼処ら崎嶇  
するの白を

楢川を車を下る顧視すれば佳氷の聯峰峯峯我はこぞ博の  
魚刺は妙儀西三峰抗手して我を招く似り河道を取  
りて山路を行くと二里幸に誤らず妙儀の所あり  
妙儀山は白雲金洞金雞三峰、總稱してすべし若石  
より成り巨刃天を刺すに似り、四時的美景氣象方千奇  
觀言心からいへば

群峰欲飛舞金洞石門西、  
出出山陽子、漫誇耶馬溪  
の詩平生愛誦する所今や鴻雪因縁身此境に事り悦ん  
景勝を採らむ流飲喜々情林示す依は凡某片に總に  
道寸者も佳の事頃程す。



妙儀町を過ぎ総門の下より老樹の鬱蒼同を經 阪路を踏  
るに数町妙儀神社と仰つ神社といふ武尊を祭る創建の  
年月詳ならずも妙義大権現と稱し僧尊意の勧請に係り  
此神社殿は壯大なるを飾り金翠を以て塗るに丹朱を以  
て古雅といふ鳥潔自ら神威のいよ高きを覺り其周圍  
は白雲の群峰未だ不可老候の如く樹木之を點綴し風色  
頗る秀麗也(遠極り也)  
路を左より金洞山の方より山腹は小澤某の拜借地  
果樹を栽此男長く独逸に在り供養し帰汝官に就き  
俸を食ら此地より果菜培養をなす此邊に樹木を

く草山ありは左に金鶏山有りは金洞山所眺望は殊  
の外快潤なり坂漸く急と道輻怒と狭く行くと十全町と  
中ノ嶽第一華表跡に坐り此処より信州の峰巒を見下らし  
又天燭峰を望む

此より阪路崎嶇にして高低一在り高き登ること数町して第一  
石門の中天と峰をみる其高き何丈なるを知らず巨岩  
天の沖に穴腹に巨孔を穿ち天然此門を開きす神工鬼鑿  
此より登りて極り其が壯觀を云ふが如く松樹其上に鬱り空翠  
常に濕り朝日よきぬ雲の滴れを笠搔を打ち流風夜を  
吹き夏猶ほ寒し猶ほ登ること数町路をなす此の荆棘を

羽黒白神飛龍



排と志を踏む困艱言ふから行つた石門達す力の  
如く巨大な石を以て念は山中を以て柵せられ鐵鎖を千餘  
リに斷り其下を以て上は曲りたして下は殺四柱相倚り石に相  
支へて上を壓して特に倒れむとする者如し此より三石門に以て  
高き僅く三丈餘 巨木其側より四石門は柵めて廣く  
射と見れば萬尋の深谷なり路は乍半絶せり怪偉跌宕  
此より柵る此向登るに隨て道愈々狭く且岩石滑らかりして足掛  
悪しく歩石門より上には至り難し此他も空洞然にして但  
し上り難きは進遠望を以て星穴射貫穴、東西体内穴、丈  
母岩穴、鞍岩穴、級穴、蜂室穴、鳥城穴、河波岩穴、動岩穴

せし志を十五石門と柵す

これより妙儀神社奥の院を以て路すがらに今も成院際  
は千有る層より百十層なるもの四段五段外降し深谷地  
を帯びて河を産する状を見れば整まると穴やちまや高  
山穴の天に横なる河、團扇の執をもち仰けは刀して削るは山  
煙雨霞の子細なる泉石のく明なる実と天上の雲霞奇にして人  
間の妙絶なり奥の院前を祝融の火より今は假築のみ柵に  
此より寂かな天狗の聲を聞くと云ふは總に長流の碑より南朝  
忠臣にして隠れしに河は表長流して天年を終へしと云ふ  
河なる人なるまはほし





仲は一夫巖穴元と超峰し執將に天を摩せむとするに  
 リ朝の岳と雲先次は白嶺仰り危磴之と連る鐵鎖に懸  
 鐵梯を踏み此より西去過り其河逕を過て由て通  
 嶺を越し此を越り別先岳の絶頂と昔振衣瞻望する  
 峻なる靈嶽を仰眺して向上れば萬尋の青壁凸凹して  
 遠望し空洞する幽谷を越して直下せば何の緑苔は空  
 と暝眩くや為當難の挂人遊歩に及む荆棘の穢るる鳥  
 跡僅く道す天造地工の精妙なる見れども言葉は述べ難く  
 畫も筆にうつし易かざるの奇を妙画の何より目に見  
 自問く物心夢を夢する何んぞ現にして現なきわかれ





我  
 を疑ふ謝眺子柳州の筆を以て巨細之を賦せんこと難  
 且た況んや余の拙者をや中に自然の大風景は時に人  
 び然と言ふ能はざらん

歸りて奥院祠に此名を題して去る山中の奇勝は志峰  
 可しと奇絶なるものなりと金洞山中地志を望むを以て  
 七葉の石岩をたゞしりしければ載す玉綾の龍を見むと  
 導者をして連日早天をばきし眺めたりと且つ其  
 妙なるは路半里に過ぎざるも峻嶒たる故行厨の用を  
 たすはけはれと心に打歎み金鷄山は上を以てけりし  
 これより白雲山より上りてまた又樹老なる妙義祠なる



洞より折し上ること東<sup>ニ</sup>達して絶頂に達す此は中ノ嶽也  
此の嶽老嶽多<sup>ク</sup>流上には天<sup>ノ</sup>断崖有<sup>リ</sup>詠する所其色も  
也黝黒にして中嶽挑紅色は大<sup>ニ</sup>黒なり然るの回光  
樹葉を<sup>シテ</sup>陰寒晦冥一<sup>ニ</sup>線自光以上<sup>ニ</sup>青き色を<sup>シテ</sup>路  
に<sup>シテ</sup>中嶽<sup>ノ</sup>高き<sup>ニ</sup>許<sup>ニ</sup>當<sup>リ</sup>水<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>深<sup>ニ</sup>身<sup>ノ</sup>健<sup>ニ</sup>也  
細く<sup>シテ</sup>糸<sup>ノ</sup>を<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>他<sup>ノ</sup>心<sup>ノ</sup>成<sup>ル</sup>を<sup>シテ</sup>風<sup>ノ</sup>也<sup>ニ</sup>絶頂<sup>ノ</sup>去<sup>ル</sup>  
の上には大字<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>あり<sup>テ</sup>洞<sup>ノ</sup>教<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>竹<sup>ノ</sup>を<sup>シテ</sup>編<sup>ミ</sup>合<sup>ニ</sup>方<sup>ノ</sup>文<sup>ノ</sup>餘<sup>ノ</sup>大  
字<sup>ノ</sup>を<sup>シテ</sup>造<sup>ル</sup>し<sup>テ</sup>して<sup>テ</sup>冬<sup>ノ</sup>活<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>石<sup>ノ</sup>片<sup>ノ</sup>を<sup>シテ</sup>り<sup>テ</sup>一<sup>ニ</sup>福<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>所<sup>ニ</sup>  
を<sup>シ</sup>常<sup>ノ</sup>流<sup>ノ</sup>遠<sup>ニ</sup>望<sup>ル</sup>は<sup>シ</sup>死<sup>ノ</sup>自<sup>ノ</sup>聖<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>以<sup>テ</sup>達<sup>ス</sup>持<sup>ル</sup>し<sup>テ</sup>心<sup>ノ</sup>也  
し<sup>テ</sup>大<sup>ノ</sup>権<sup>ノ</sup>現<sup>ノ</sup>大字<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>前<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>知<sup>ル</sup>なり<sup>テ</sup>剛<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>山下<sup>ノ</sup>

幾<sup>ノ</sup>部<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>嶽<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>望<sup>ミ</sup>此<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>には<sup>シ</sup>搥<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>連<sup>ノ</sup>峰<sup>ノ</sup>絶<sup>ノ</sup>頂<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>見<sup>ル</sup>  
妙<sup>ノ</sup>儀<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>景<sup>ノ</sup>致<sup>ノ</sup>概<sup>ノ</sup>略<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>外<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>脚<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>用<sup>ヒ</sup>て<sup>テ</sup>述<sup>ス</sup>上  
り<sup>テ</sup>行<sup>キ</sup>難<sup>キ</sup>なり<sup>テ</sup>山<sup>ノ</sup>陽<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>耶<sup>ノ</sup>馬<sup>ノ</sup>溪<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>穿<sup>テ</sup>り<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>見<sup>ル</sup>  
山<sup>ノ</sup>水<sup>ノ</sup>を得<sup>ル</sup>も<sup>シ</sup>生<sup>ノ</sup>動<sup>ノ</sup>せ<sup>ル</sup>を<sup>シ</sup>論<sup>ノ</sup>據<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>妙<sup>ノ</sup>儀<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>  
水<sup>ノ</sup>せ<sup>ル</sup>も<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>景<sup>ノ</sup>致<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>是<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>歎<sup>ス</sup>所<sup>ノ</sup>なり<sup>テ</sup>聞<sup>ク</sup>が<sup>シ</sup>  
之<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>山<sup>ノ</sup>陽<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>東<sup>ノ</sup>游<sup>ノ</sup>折<sup>ノ</sup>妙<sup>ノ</sup>儀<sup>ノ</sup>遊<sup>ノ</sup>か<sup>シ</sup>し<sup>テ</sup>今<sup>ノ</sup>洞<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>は<sup>シ</sup>門<sup>ノ</sup>及<sup>ニ</sup>  
心<sup>ノ</sup>堂<sup>ノ</sup>及<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>ぬ<sup>者</sup>豈<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>與<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>語<sup>ル</sup>に<sup>テ</sup>是<sup>ノ</sup>ら<sup>ニ</sup>む<sup>者</sup>予<sup>ノ</sup>今<sup>ノ</sup>ま<sup>ニ</sup>耶<sup>ノ</sup>馬<sup>ノ</sup>  
勝<sup>ノ</sup>を見<sup>ル</sup>が<sup>シ</sup>故<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>孰<sup>ク</sup>も<sup>シ</sup>優<sup>ク</sup>を<sup>シ</sup>判<sup>ス</sup>る<sup>能</sup>は<sup>シ</sup>が<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>無<sup>ク</sup>  
溪<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>字<sup>ノ</sup>は<sup>シ</sup>実<sup>ニ</sup>に<sup>テ</sup>一<sup>ニ</sup>言<sup>ノ</sup>快<sup>ノ</sup>語<sup>ノ</sup>なり<sup>テ</sup>也<sup>ニ</sup>西<sup>ノ</sup>游<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>期<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>自<sup>ラ</sup>  
ら<sup>ニ</sup>之<sup>ノ</sup>を<sup>シ</sup>知<sup>ル</sup>なり<sup>テ</sup>也



之より妙儀町に過り先を健しし一店より午後飯を喫す時  
に所より大凡此を来るとの如くに白雪山に於り此は全同也  
據りち首を擧すしきと人等は僅に所同を以て過る景  
勝を採り畫しければ道者を知らぬ皆余健脚の無此に  
るを補是也

三時頃を發し程なく松井田よりこゝより標高を七里と考  
ふに故今も半人位行くと此には明日大い便なぶしと路  
を同じ行つた天色や曇り一雨をふりけしやたに到り  
七村落のみにして緑に家なく人も逢はねば道も同ふと  
はれ大に固却せり

廿二標名山

日漸と暮れ雨降りに泊る家なく廿五方猶りた  
里百の人の程暗くぬに五里の路を歩み漸に鳥居を  
来るところ少くはば二軒茶屋を以てしは標高を七里と考  
故標高のつるを以てさなくも提燈借るを得しと況切に  
教へ呉れし人や勇みつ行に老樹路を塞ぎ濡れ枝  
たじ款を拂ひ物凄を限なく草鞋は切れ路を去る踏  
みつらに痛み耐へ難く漸に二軒茶屋ありぬ時に  
時半頃一軒の宿を乞ふ主異儀も許しこゝに山  
中の旅屋に雨をう眩し明くれば家者といふあり細く



野菜摘まると共に新鮮なるを以て味ひ美なり

二十日天気快晴ニシテ里許の上れば榛名所行り法師  
の家を尋じ中倉家傾き柱曲み庭に草生しる僅かに昔  
盛衰し面影も残唐銅の幸表をくもり石段を登り  
随神門行りみぎの橋を渡れば溪を隔て鐘掛岩を望  
む天然の岩橋して長敷の石より恰も虹規を引かぬ  
苔滑かに雲蒸しより見様よきは馬の鞍も見え且之の  
起りし所なるに三里塔神橋なる行路から袖木の岩  
の石を先導先大黒岩なる行りに神門行り之をまれば  
は双龍門行りこまの向右側には獅子岩しふとか表日

の岳月を山雷が岳なり

雙龍門は棟柱と椽に龍を彫り其傍には柱の如き大  
岩屹然として立つ是を鐘懸と云ふ此外社地は都へは先石  
を切開きしものを覺し諸処に巨石大石実元とて其まがひ  
其奇なること云ふ計りたし蓋し天工と人造と相俟り此の奇  
景を造りしこと疑ふべし河原右折すれば本社及拜殿行り  
其他建物数箇所皆彫刻精妙なる上に金銀母朱の彩色  
を施し幾百年向雨淋風打し今は其色錯ひる心も尊く  
とて奥床と其者は金碧煉堀として何れかし阿羅  
の如き思ひ遣ふとい懐かし本社のははる巨岩室を



衝之垣へ其形略人のく首行肩行其の牛足さきのみ御  
志と学頂上に白帯をきて尊堂平七側には原風山を  
の字宝元として新寺到了也老樹しんとして松竹鬱蒼に  
日光を遮蔽し溪水存之流颯颯之白者流し夏を心  
之地せ之様名神社近地の御社として古は三千百切者  
せしと歴長九年山法友の牛印を南光坊を遣はき  
れ幕府の頃には別當主剛院東嶺山に属し神威山殊に  
高なりしが今は神官の守るところなり本社には之れ由岐  
余を等々創建の年月もに詳なきと学國念よきかきせ  
むへし折し裏門もを火焼世ひそれも伊香保の方北

行くと敷田は谷川を隔て對岸にづら岩と云奇岩何  
高き三十丈餘して其形如頸長き猿に似たり仔細に見れ  
ば葛龍を數積むやて今や崩れむするもつに似たりとて  
昔葛龍の名を百石しと云と云雅称して九折と云大不可な  
るが覚や楠屋途に且三尖氷室岳田刀甚不なと云と奇怪  
たる岩をへり政や悪しければ汗流を耐へれ世に傳は  
る風流しと事る山と云書きまば天神峠と云然り  
こに様名湖を俯瞰す日景を映に一言し満目  
と云高き様名覚へ胸宇を洒然と云に不燈何有  
名なりと垣原君の奉獻せしと云又大奉表なり先



年峠の茶店より大せしとて、此木の端を棧舟のりて  
今も猶ほ里々燻りたる夜を存す此まゝの道は萬葉集  
のほろの岨の棧原ゆゑに奥をさうねたまはしきは  
と詠しむ如く昔は棧舟の木多し山を棧舟をさけしに  
今は古杉老松いやかた生茂なり

棧名湖に伊香保沼といふ又棧名を神の御手洗水と稱す  
周圍一里可湖の下流は決して吾妻川に下る冬時けこは張  
とて湖の両根より夏に小ぢんもけしきはありとて  
是が湖岸には伊香保富士鳥帽子が岳と髻柳山双岳  
掃部が岳等三國白根淺間碓氷など顧所の同者にして

煙霞糺糊中に隱見す伊香保富士は小富士といふ湖  
の東此岸に峰へ突然と一個小峯を冠す歡阿其世底に一畚  
山とて堆の小丘なりとて神人祀の中に此湖とを富士とを冠す  
に其功を貴を冠すに空しく相明りれむ憤奮に其貴の土を  
つがして去りて山とせしと齊東野人の話ゆり事ながら一笑  
を值すやと鳥帽子岳は湖の北岸にあり冠山又加賀柳山と  
いふ形を風折鳥帽子といふ山とて髻柳山も形ちの似  
たりしに又か歳に頂上に石ありて其面をてて見る見ゆ  
是何所しか今の名を負ひしは由也はくはしければ者ま  
湖はく三方に山を環らし東岸の者は遠浅にして伊香保平







の字をいふ事合せるや、迂曲せる山脈を下ると半里伊香保  
より山を下り、此は元嶺と云ふ山の中腹を拓きし所なれば  
南の山を自ひ西はた、臨み東北に向て田野を見晴らし、家  
は皆崖を流ち下り、石垣を田畠みまゝ上に建て設けられ、この  
根は甲の所と並ぶが一段より高く、其状楷梯を以て  
かゝるが如し、風光雲霞にけりぬが、今や、避暑の客とみ雜せし  
俗境となり、これば久志の地より流れて一途して去る  
此より山を下ると半里、流川に流る、路の分岐の処必ず標の  
り、此流川を盛して、道のひらけきを、知れし四里ほど、前橋より  
り、賑かき所の某旅所と云す。

廿三 上州風俗

上州の地より、汝漢にして、其西部は、浅河は吉乃の礮礮の地と  
言せし、其地の地方は、一般は田は、先春の種は、畑と云す  
べし、又水も乏し、かゝる力根の水は、実々天旱も枯るることなり  
水は、彼等は常に秋成の曲を、期し得べきなり、農業者の  
利は、斯の如きに、耘耨業も著しく、登達し、よれば、金融活撥  
にして、七月、齒の、齒は、す、此には、五、四、十、田、の、張、幣、の、外、旅行し  
銅貨の、張を、見ると、者れなり、況んや、銀錢、は、は、果、は、こ、き、に  
かゝる、程、なり、野州、は、も、は、一、田、の、水、錢、と、張、幣、の、二、種、見、れば、  
小、事、の、方、を、取、ら、む、と、す、た、此、処、も、は、張、幣、の、方、を、運、じ、て、取、る、なり、







某年、村は某村二百有餘の土藏の中、百十有餘は  
書畫に具賦の爲に切り抜かれり。又放大たゞも成興にせ  
り。毎年必ず夫より一は以て高機金融。汝汝たる故と  
も見るを得へし。前橋の二市、村も毎五年に必ず大火災  
あり。大事も鳥有となせし也。

かく人情たるを、此に汝汝劇烈を成すには、一は義侠心  
は常に彼等の胸臆を支配し、先天的遺傳として存する者  
の心、一旦を氣投合するに於ては、大枝或百圓乃至幾百圓  
の金錢を無證書にて借し、是も親友の念なく、何れの馬  
骨やら牛の骨やらも、洋ならざるに、唯數圓のせき、旅人より

鐘愛せる女を以て許しなむ。又白子風俗ならむや  
村一般、執事は皆、~~洋風~~ <sup>枕帯</sup> 洋風なり。或一商人  
予を語て、此の村には佳く西三百に、女を以て得て、  
りとは三三を要する。唯、酌位人並に出来れば、  
故なり。是等は肝心なむ。何れに、故に、故に、故に、  
社を買ふより、一般、輕く、且、廉なるは、執事、  
皆、<sup>是、後、増、行、の、結、果、は、一、利、一、害、</sup> 一、利、一、害、  
下等社會、武部、村は、女尊男卑、凡、行、は、  
子、久、し、見、せ、し、は、物、手、喝、采、て、快、と、呼、ぶ、な、る、べ、し、  
の、次、國、は、皆、下、層、婦、女、の、手、に、渡、り、て、線、り、と、線、り、と、  
一、外、の、國



を絲にせば七事を得へり品も取録せしものは一日申乃至二  
斗を以て受らるるを得ぬ練もその下限りて其絲の美  
しき或は時に若干の刺増を得べし而して其味などいふ  
事なるといふまれば一日に十斗以上も得へり事と味と二人  
有り申すには一日一斗五斗を得べし男一足汗水を以て申  
すべし三十斗位を得れば其に業を以て家を持て大に  
も起しこやう飯を支えどし一斗五斗多く練を有る才利  
蓋なりかしこ金を得る者盛に執力を振ふ故にこゝに漢  
七事申すの風を以てし来らなり其他のことはまづ御書  
に教を授せしむれば姑く之を措く

苗赤城山

赤城は前橋の東北にあり上毛の里と云ふ妙義権名と云符  
して上毛の三名山と云ふ今は巴に妙義権名を跋渉しとれば  
市の序と此と登り他日極楽と云ふ先づ程より又決して  
九月百朝来星天なりしとてさうあらふことありと云  
を以て後同といふはた山は富高にけいりて日暮り来腹  
以上は見ず唯此の野のひろき富高の程も有り様なり  
行くと二里小暮と云村の以て村端に大鳥居有り赤城  
山宮をわたりてよりすまらるべし馬路を以て行に程  
なり此の野に出づ



此より一里程の回踏を以て夏草繁り諸処に林の團と  
し何れ又草刈量の多きを以て馬に草じとかにあ  
み自ら刈行なりまじりたるにや馬は夜をわが  
し心草食ひまする所漸くに行きすれば夜を村所  
こより上り道なりこころまきまき方々沢山左に銅割  
の峰を望む峰は赤城土山の一角なり可成り高きが二里山として  
頂まき青し

上り道はさふ細かき路は迂曲曲折せり傍らに木林  
なる叢林より溪水涸れ流して地音く吹かして重破れ  
て赫々たる太陽線の光を放ちり水は暑熱下堪へず

る処をせす清水掬して湯を醫す行くと一里半許して坂  
なりとやまきまきこころ牧場は19分止牛馬の群を遊  
ばぶしはらして大沢の岸を歩湖周一里三丁恰も榎名  
を同じ程なり其日景色は彼に一書を頼するといふ也  
そは彼が曠野なる奇峰もなく木と草とを以てし  
少丘の周環する故なり其水は彼より清水の信じて禁煙  
としてまのく一望鏡の如く磨きこころ自りたすも似たり  
毎年冬牛と此池に氷を敷し夏にたれば切出す柵として  
亦佳良の草を食ふ此沼は一を石垣沈む昔より歌枕  
として用ひられ



拾遺集  
収拾遺

か山の石垣沼のみどりには戀やわらむ心よしをまみ人丸  
ひま推く石垣沼のあやせ早思ひしらすし今日たまた小辨  
の如く戀を泣きみまもる麻代代集申下多し其下流は  
沼尾川となりて刀根とす

湖岸を行くこと半里南にゆくには赤城神社有り物も有り  
る鳥居はつかり其奥に祠有り宏壮なる村の鎮守とす  
しやうとす様なり社極なり昔しは社殿も由りなむ五  
百年前大風の日に神庫を破壊し社殿も旧記を失ひ社  
殿も損じ神様も食をなされ今日に於て情れに於てお祈り  
とて家創建の年月は詳ならず或は大同年中にけりといふ

山は下界を其の奇花珍草を産し敷盛草能名草花  
の如く可まはしなれど見ぬは知ず山岳眺望は殊に杜快  
はと望望眼界を遮るるなく開州の大原野を眼下に見  
下らし富士甲斐の根は嶽立科清山有り其地東の方  
はの光の山つらみ此より越はるる山西にまるとして浅河の  
根武尊たの愛峰鳥嶺を直下し風光絶奇なりとすま  
しかども折れ空かきくもり里流しとらむかきく今もた雨  
沛然と降るをけしきなれば眺むるも様なし有る  
狭窄固一定法が隠れ家ををし山系藤河は山中者  
るは確かなんとも河の邊にや河くも明ならぬなり



洞前王旅亭行就年終身此湖中と云れり射味甚だ  
美なりと云し段々下るば此亭に暫日逗留し湖山の清  
し氣を呼吸し山色湖光の間に浮世の塵を洗はむと思へ  
どこれと詮じ忽ち一棹の暈雲をくゞと生し長く湖  
へ湖解の群山をのみ山色幻動し湖光空然とせし狂風  
颯として起り一盞の甲に波立ち物にして岸を打ち老樹思  
辨し雨の降りしとて雨聲如く板屋の軒をうち天地晦冥と  
せしるべき様なきに舟みに限る舟に餘す所少なき折ればは  
雲波の甲に山をくゞとせしとて坐座を披て身とまじ思  
こころ高きと云つ

此の亭少し坂下れば跡は樹蔭まじ皆下りたり十二丁許  
して小沼といふ所脚下に深く水湛へり是も右と見ゆが  
或部をはいきか欽指せし様なり鳥の神のさし  
しと歌上りたり黒雲四面にちりて然人を解せず雨  
は沛然として金を吹せし風颯として吹く雲を  
吹く上り首もたせし如く覚へ坐座は徒に雨を  
防く便ならぬ唯だ一舟をほゆるのみ此頃家暗黒の間  
時に電光火石の土をかく一軒しと過り赤き曲線の  
舟は折して見ゆる奇観は河れも物凄して恐る  
しからん



かゝ暗らなりて夜の峰に路は名もなき山嶺に成りて固却す  
ること方ならず先不取とせしむるに雨をさゆれれば是  
より身も馬も瘡もいさむる也まて是をみしめて下れば  
一天岩の揺りて忍ちしゆらしりくと雪覆車り俵坂を  
つがや数十分の途かに谷底までたりと音して止ま  
りて雲の底見へぬ岩の深き推し測られぬとらりて  
競として深淵に臨み氷を踏むの思をしりて坂を下  
りて樹の力に寄り付けば梢の雪は溜りてはるる所  
らに氷をぬらし雪の底より遠く陰冷り地は氷の周  
りには雨珠を世に世を産は濡れぬる為自身より氷の様なる

流雪奔騰して君行するに四圍の萬峰幻變し態  
の定まらざる移る数峰と見しが合して一山と見  
へし心は数峰をより忽ち有り忽ち無く瞬を定めて見  
ると然れば萬松鬆嵐を散し濤を雲中を捲き飄々  
と天風吹きなり萬松散雲をこし身は約空處を撼か  
し怒浪の驟に依るが如く坤軸揺り地維砕けむ計り  
り  
漸く山を降り一道に出づと交して再び何れも躊躇ふに  
折ぐ農夫来りてはこれと同く前向の細道を行  
くべきよしといふ又此大路は日光への別街道とすぬ路の方



見ゆが赤城の雲萬重の巻の衣を捲りし松  
火も見えふやこたしこ水も又田畦の細道も故叶  
路を迂り極せしこと数回なり山吹りし土里に大回りの驛  
のふり燈つゝの夜なり

とほ旅衣を投しぬる衣物のき捨て借りし着飯食  
い酒飲むを漸に心地よくなりぬ実今日に登る山せいの  
みにして格別の眺望をなく雷雨も遇ひて急をかけたし  
は失敗と云ふの外に知らず山霊余の秘景を示さむことを  
惜みし故に将て天の奇景之變を以て余も亦し大怖す  
所はしむとせしむ故か

羽皇百子登御時夏  
探教十勝山三六次  
之敷河

廿五 毛野巡覽

九月首晴の雨は降りなく晴れ朝日之光うらかなり夜  
の初も心の中吹り右折し初根溪みづは後良湫川の  
三尾より流し来りて左曲するに河急流流ちて深  
水もたすつたり吹り雨も水もは明かに見やりしを  
迷憾なきれも水勢は急にして湯に漲ぼす  
る水は盤渦を旋らし逆流翻回し西崖に觸れを鼓  
すの音は白子の雨聲に響けし如し崖上は  
老樹森して枝を交へ天日も蔽ひ清陰冷然なり崖下には  
道了権現の祠有り奉納の幟朝風と翻りては手より



是より西河に高津戸の多流り西岸は断岸懸壁刃  
を以て驚きふく刺立し上に橋を架す中天と橋より雨後虹  
の如し一休のききはかの猿橋に似たり輻ゆるく窅然として同  
朗きまよや彼と趣を異する橋上より立ち見れば高岸  
の上には古雅なる老松老し倚り垂れ水を掬せむし橋下  
の水は甚だ深く漫して流れ甚だ静かにして韻なきが如く  
佳境か上流より下りて急流先と激し遠雷と響きあひ  
~~天~~ 大聲を放て如く山鳴りたる如く万が一有る起  
る山道の極みとして恍惚とらむ若しまれ涼林の候青  
影霜をよしの桂樹の如く染めは幅の雲錦瑤烟として更

一層の奇趣を添ふし此地も山里即去之の成候しが桐を  
氏の乃に七きれ攻ち里見陸見之はみしと天正二年秋田  
に試みるに碑を傳ふ所此の如く人間の事轉寫するに何  
依然として恙なく此の境に何を以て游戯者少し勝るまど  
甚だ世に前記

二重桐生まゆる時猶ほ分たり本林川は尾を討ひ其家上高  
す伯母君は久しく見奉らざりしことえいしく世に法法  
おまより侍むことを知らぬ朝生をせしむし酒肴の  
られた酔ひたにやにけり止のまに又百を延はずは見目  
唯ちるを家に行り酒を酌み夜をまじりて飲ま



四遊に帰して生つ伯母君等、列を借み敷町迄、東まで  
り別れ立ち歸りしを、不返遊に、平より、腰や、曲り、  
く、弱く、し、足へ、玉、ふり、哉

伯母君二十九年一月に、ふり、玉、ひ、ぬ、余、が、見、奉、り、は、実、に、  
此、時、を、以、て、終、り、と、す、今、年、を、持、て、訖、し、此、に、年、の、歡、  
教、禁、む、が、然、る、者、良、久、し

桐善驛中、お通、を、も、り、目、鼻、を、行、き、某、陶、若、店、前、を、過、  
こ、に、其、座、何、も、し、て、え、し、に、は、一、何、や、ら、一、つ、打、ち、破、り、ぬ、人、も、た、ら、  
お、れ、ば、知、系、に、過、き、お、れ、返、く、し、も、を、え、は、男、兒、に、も、似、せ、る、甲、  
者、の、こ、と、お、れ、ば、主、を、叫、び、價、を、伺、ひ、不、要、と、も、ふ、を、無、理、に、掛、ひ、ま、す

昨日は赤城山上、風、を、逢、ひ、立、吹、き、上、げ、ら、れ、首、も、か、る、。想、は、  
り、今、日、は、雲、座、る、に、此、危、り、い、と、せ、此、等、は、此、郡、令、の、者、に、  
り、来、年、の、旅、は、お、れ、は、一、王、夫、改、良、の、方、を、お、し、お、ま、す、し、  
程、で、く、下、野、田、へ、の、四、里、は、て、足、利、に、い、り、午、八、食、す、事、し、有、ふ、  
なる、足、利、学、校、を、訪、ふ、門、前、に、一、軒、子、が、い、り、是、監、督、者、の、お、ま、を、  
お、ま、す、年、お、ま、さ、な、ふ、伊、吉、の、聲、お、き、お、み、ぬ、老、姬、出、て、ま、り、少、  
し、し、御、待、た、れ、と、い、ふ、に、玄、洞、を、踏、し、て、待、つ、中、を、お、規、へ、は、  
二、重、子、几、を、倚、り、て、一、老、翁、に、對、し、書、を、讀、む、向、法、再、い、ち、  
仔細、と、お、ま、さ、な、ふ、不、学、を、覺、悟、し、は、し、て、其、課、終、り、し、と、見、(彼、老、  
翁、鍵、を、片、手、に、こ、ま、こ、ま、り、會、指、し、が、先、と、お、ち、て、中、内、)



この門は昔しはいさめしく儼然として居りしが先年市中に  
火起其火の有り焼けた今は屋根なく焼け集けり柱立  
つみは校といは昔は建物数多有りしが今は大成殿の  
残りし扉を固めて中より中央には文宣王の聖像有り  
彼の土より汲来せしものにて今4丁と字年と經よりと云ふ  
傍には河神位有り左には聖子復聖神子右には  
法聖子思子宗聖曾子有り其右方には小野管喜像  
有り藏書ものは窓にして尾張侯の書子と云ふ本壇有りこは  
や門は掛けて存して愛ほしく焼けた集り華政宮の大成殿  
紀伊侯の入徳明使將龍溪の奥に校と云ひ外には朱

常水の用ひる瑪瑙石の硯臺有り老翁は跡又たしま  
し其家へ法じ茶も伯の奥に校に藏の古書をもして見す  
宋版の四書五經左傳文選等して皆朱點を付し每卷  
頭に是利字校を付し又此書不詳出字校聞外と  
し下下に室窓実と記し花押も書きし監督の老翁余  
を知らぬ者と思ひこや眼鏡越しに余を見得意のかよひて  
説き曰く昔しは竹筒して版本はをりしが宋の時にて夜明せ  
られ此書も書付に巾行せられ故に幾年か故船載して来りて  
此学校の中興者なる上杉室窓実購ふて付せし者なりと  
知れ切らず事従ふと云ふと思ひせがらし唯こして謹轉ぬ



又以上古より四書五經の爲本なり以百オト點を付しその他  
論語義我疏と題せる寫本有り世界唯一部の珍本にして前年  
清國籍の便物を買ひしもの者なりこの隣には小江校印  
抑山学校の創建あり之は諸説紛はして分明ならずは海和  
天皇の天長年間小野篁詔とて一書或は上古國字の遺制と  
以て又は三利義我東の建たとて一爾收朝綱を以て学政も陸工廢  
絶せりか永享三年同上杉宮爲実再興し鎮倉田覺寺の僧快  
元を祥主とし是年の宣付を以て大と文教を振興せり此より  
細流の所管となり代に江戶金地院に付属し徳山氏の時学田  
を附し士民を教養せり此明治革新の際藩主に白氏に

校務を委任し以本邦の管有を付し三利の有志者も選て  
保護員と爲し其の釋奠の古礼を行ふを以て宗長東遊のつ  
に云ふ永正三年五月十日思ひて去下野國佐野に出立七足  
利の学を校に寄り侍に孔子の像を以て諸國  
の生徒を以て日々に侍りて其は情に於て見え侍りて  
其心山に記標を隨て年々といふ文を詳にして其よし  
これより佐野に至り公園に遊ぶ十州園といふ丘上に伊を以て眺  
望可なり園北端稍小高き堂生、地に本冊を讀し御  
陸地と標標を建つもの其由縁を知らず也道徳の旨あり  
真跡也、虎符石片并其殿の驛中の真寺の邊に伊



一見せし言ふに次話にたぬものなりし由蘇沼佐  
野後の古蹟たゞし要せばは行きても見ず

大伏河を過ぎ唐澤神社華表より左折し野徑より富  
吉村を経て唐澤山下登り山は往古藤原考仲が城と稱せし  
其遺跡地名と照して能く考ふるべし一洞は別格官幣社  
として考河を登り明徳十一年創建なり山は一堆の土壌隆起  
すに過ぎず其も前山に峰巒を遮断す故に二分を崖外  
日辺より相を天末と瞻駿嶽南に揖し常峰東に拱し武  
甲信船を先の津山四難列して眼前より風景絶佳煙霞鮮  
明なり昔倉山より四路あり大伏より歸りて宿す

此は天理教の徒と合ふせしが其様を現るに余も眞信と見  
せし二里許に先船山と号す山は皆先石より成り登路三向  
山空船を過すや故に是を舟山と号す地蔵堂あり寺は昔  
勝寺と稱す空を庵の中佛者へ明願靈夢を感し香山と稱  
りて堂を設く満山先集雲天にして古松繁茂し冷風秋を吹り鷹  
目は船を唐澤向し清水濱臣歌なり

淡く濃く松林見て下野や都加山ついで雲水に  
ふり太平山と号す登路十石階を踏む鞍首越して三  
光神社あり道は慈覚創設の寺院なり洞版古朴にして  
西面正河は心園なり古松老柏枝を文て日光を遮りて遠



望大は眼界曠洲東南數十里の唐原は雲十連くし中総  
の山中武峰は層々を束ねて圍繞し辰の如く東に汎波河の要  
富甲ありかふ極東大野鬼怒の長流は蛇蟠して平野を  
蒙向し蛇の蟠る如く前山には赤麻沢の鏡も澄み後山は  
り風光明媚と云はむ東方に虚空藏堂あり朽木町眼下に  
此地元は元年水は矢狗壺の據守せしと云ひ知らる  
午の山より朽木あり河邊山しぬが原は里餘と云けしが行を  
壬生とす宇都宮より不到外に似相して轉て地上に描ける様  
戰場の首級散在するに似たり、ふより三三三は松林なり、昔は  
宇都宮より投るす

其那須の路

九月廿日將に轉に此より歸らんとす柳が水は味爽宇都  
宮を先鬼怒山を後白澤阿久津を経て氏家と云々  
新田西道の分岐をたたり前身は新道を而して長定道に出  
て鐵道強坂に及びて七里程宇都宮より此坂は驛は通ら  
ざらん

此坂の坂より南に富士遠くを筑波は近く西方には日光  
塩原那須の列嶺群嶺重疊錯合して健色霜霧然道は向ふ  
かく吟懐をよそ宛開ならしむ喜連川佐久山を經大田原  
を經き猶里許しはよそ宛なる里の亦信宿よりいふせむた



一和の宿ありし。

喜連川此は江陵路に横けり 諸如川流河比那次岳  
より控すものにて市路を那河川と名す此邊は那次那丸  
と信濃那波原は鐵路以西也此邊は地味きく要し  
か次古より同し地なり 此道中分岐す所田圃中道  
路雖も標木植て其先を示し河最便利を覚へし  
九月廿陳貫錫掛寺女於野を徑正午止に九里余を歩  
しこれより重田河に於此日一の足らざるし  
若し此邊は古は北境の領守達を觀る道取して女子餘り  
しもの多きが其道餘りしはが流具近年絶つ所也

今も坂車軌をたき猶餘りし大道と草生ひ今三三條  
の細道又之の加へた新道東路より近き故鐵道乘  
る所抑て安行する 今皆此により 此道は石田をとり昔の  
の經事奉 夢幻泡影花に次りし哀徳に現に大田原の如  
し年々人の少減す

白河驛の南端には陸長太垣戦死する處及會津人士戦死  
の墓あり 此の今は此處に在り

九月廿九日嵐車に乗り白河より三つ車定むり此處西此  
中道大郎監探者妻の佛山を望む又此鐵路に平行して大道  
あり是實に去年夏二三の故道より此處より山江陵皆白



秋人の想より数日遊し足可揃し如僅に三四時を待て思  
へば千里の長程一歩も歩かずしては其地を去らば  
息なり重く道より相討ち振るる不意に因て投す次夫の  
山田景彦諸君など皆集り流石に酒樽し肩相摩す計あり友  
酒を飲り唱歌踏舞其間を限無し余相振り書根など  
しこと防し未だに酒樽のままを免ず其時ほげの  
彼有難者流の  
俗風流と書し一然無邪氣の秋見かゝる地と  
半程雪覚の吹来の喧騒寂しきふらげ冷風兼拂し風  
蕭々溪澗枕函の鳴るは此れを思ふ人彼を引か臥し  
釣竿を釣るははこも堪し得しはれ

其 不意山

九月九日、青板より不意山の次きを宿し者は朝から  
三時と申す内を待たずして常々前より波夢を引かば  
たり討ち入して出先が南へ真山の細道より木の根を  
かきわけて登りて思ふ濁川の水す白く石並みも  
川のふちにかつたぬく木のかげがなほ橋はせ後り日  
さしぬみやみやみやとほく上は園のまをみる華表  
り遠く田のりの本道と申すなり  
山下平原帯子しき眼よりみるは次上より見  
ぬてまより此れは社殿の様なり鐘若千納め



いし寒河原の三つ平車塔は七種のものをいしこれより数  
平たんに大馬の骨をいしなる西側の木を根の根に枝を  
出さず下さぬなり右左は右側より程深に流るる同  
も逆さるるすなはち水濁川と澄川なり  
谷より次々上る風流しく暑さをいし行た硫黄粘練所前  
し山が迫り左に谷を隔て長白き滝のややかたなるを  
不動が滝と名も十丈幅二回なり澄川の上流より布を  
ささるる山あり美はしくひさし山根に流るる高し  
右に我々の別れ道を見す、鳥帽子岳の風出せいす左に  
登りしつぼる白の草灌木物の上まじり山蜂の聲も是れ清

わく北かには二峰急に峰つぼり一は熊野岳にして大なる焼  
岩いしわらしき形して人眼みは不忘山にして先をがり左に無  
れには草やまき生ふ

寒河原と叫ぶ山の中腹に河臺地にしてよりしきも焼石は骨  
露の如く処にはひ松其他性も灌木の志向に根をすまみ  
見渡す眼黒く荒れをいし身は汗のいえて水浴をいし心必し  
いしは石累と種をいしなりこはかの車塔婆とて去る又  
少しは遠の山と流る流れは早に枯れぬも流る水  
は水色も帯ぶるこにして草鞋は代か女子はこより上に登るをいし



この山脈には遠く北の山脈は下の湯川を隔て徳野岳の中  
腹を硫黄山なりすに南に二段にすべり細き瀝音なる  
は隆蔵といふなりそより三町許りれむ牛ぶら瀝音は  
半平と稱せられむすまを三段に音しをより遠しく岩を  
ころころがまきり村雲を拂ききし山巖は百群たふし  
ふも七硫黄粘鍾所なりしより真の上には鉄嶺しく沖は  
峰をさし今更なる標に覺る峰の下半は色山といふは  
ふじく色せし山なり身は牛野の岩に臨み眺むと上  
に頂より御産せしむる湖は山の噴火はして緑の色  
をみて深淵られぬしなり

御産水今神社をいひり岩を防く有るまうなる石垣の  
り白木に小く此東に白く建たれしと終極し神酒を  
峰の最高まに穴をけせりて眺むれば東方烏帽子山  
屏風は老木すき同なりてまてに女を眺むは作此峰  
の七白原をて低く築山の青麻山なりそ先には阿武隈  
川の地りなる程に牛野の小山を流る大澤より之を  
前には色山寒河原をえ越し遠く田より下の村に見ゆ  
古板の山は山に沈むし峰に認めず此東はこの山つ  
徳野岳地藏岳草山よりやまを隔て神岳岳形岳など  
より東へなれ走れし山に柳の葉に似たりそ最にしり



は白髭山根白石より品井沼此山の依地より東へ牡鹿の穴  
つき金華山はその北端にけり海上に浮かざる寶珠の如し鳥  
を森ぢぢりやうなる山の敷に形者しきは西にそれ知られざる  
まも目を定の足ればありけりはるるれど遠くより霞みぬる白雲  
ほつららぢりやうはくやしも極し

後に向きて此山はま此の方には白雲こちしつゝのこえれけり不日復  
中はまがにおすまをこまの洞の三山をこせまがれあくる高き月  
山の黒山湯後山はえり少し西に並ひ朝日岳につく一帯はしほ  
く山成り少し南に多し岐しき後山はけり南にけりまて船  
橋峰より一切煙山を先とて煙を吐きながら走り

福島の中はか陰なる山を見やられば感念里の山に遠き  
糸より山形街道は南より此に之下を通りそのうち上り山と  
心可は直に見下さるる最高は朝日岳山下を西より二枝に派  
れまき遂に一帯とて此一帯を渡りて山形にけり  
たふぬ此たふぬ雲をひきこみ久しうは見難し  
昨日はこもなき最上の天を氣ぢりか折りし風池し吹き沙ま  
りけりまきし日の色に極とせりけりけりももの道をきき  
下り城こもなき温泉をまきつゝが股はけり他日のことせし又  
社務所より津札など載せて去り午後四時半吉原に  
くるかの熊野岳なる山に詣りて知るよしなきしかなは







三河を踏歩し山間を詠み登りてを  
とてを記せば其の強を其の煙雨如  
かひ果ては法に金右の酒味も下らば  
韻士衆も是を正し年を果たせむや  
指を嘆つるを人せられむとらむとみ

丙申夏

三河を踏歩し山間を詠み登りてを



